

特116

630

治外山人著

# 苦學する者へ

讚友社發行



# 始





特116  
630

苦學する者へ

著人 山外 治

東京牛込

讀友社出版部

大正

14. 2. 5

内交





序

昔と違つて苦學は出来ないと云ふ。出来なければやめるか？ 社會の大半は遊學の出来ない無産階級に屬するが、之等の人々は苦學することによつてのみ常に或程度まで知識を増進することが出来た。若し苦學が不可能とすれば之等大部のものゝ正式なる勉學の途は鎖されてしまふ、貧乏人は無知の表象となる貧乏でも知識のあるものは未だ良いが、金もなければ學問もないと云ふのでは殆んど仕未に困る。而もそれが社會の大部分を占めるに至つては黙つては居られない。人類の幸福も文化を向上させるために、社會を圓滿にするために、國家を發展させるために、人類を幸福にするために、教育がある。そして、その教育機關は誰のために設けてあるか、社會とか、國家とか、人類とか云ふ言葉の中に貧乏人と仲間入りが出来る



とすれば、貧乏人を教育することの出来ないやうな仕掛けでは都合が悪い。苦學が出来ないと云ふことは換言すれば、貧乏人は勉強が出来ないと云ふことであつて、も一つ言ひ換へれば、教育は金持の爲めにするのであつて、貧乏人等には用事が無いと云ふことになる。文明の進歩も、社會の圓滿も、國家の發展も、人類の幸福も、資産階級が味はへば事が足りるので、無産階級等は柄でもないと云ふことになる。黙つて居れない。それも、貧乏人が教育されなくても、文明が進歩したり、社會が圓滿になつたり、國家が發展したり、人類が幸福になるなら黙つてゐてもよい、而し、十人の家族で九人まで泣いてゐる一家が幸福だとか、圓滿だとか云ふことが出来ないとすれば人類の大半が不幸に陥入つてゐるのを見て黙つてゐるわけには行かない。

今の世の中には七面倒臭い程問題が多い。そして、それは大抵貧乏人をどう救ふかの問題である。腹痛に目薬さしたつて治りやしない、貧乏人に知識を與えよ！

之が私の教貧策だ。貧乏人はどうして知識を磨くか？それが苦學の問題である。苦學が出来ないでは濟まされないのだ。嗜り付いても苦學が出来るやうにしなければ……。だが、それは一人でヂタマタしても仕方がない、皆んなが御互ひに努めなければ……。

此の本は私が作ったと云ふよりも、苦學同志會で作つたと云ふ方が當つてゐるかも知れぬ。殊に苦學生手記は寸暇なき人々に強ひて執筆を煩はしたもので、深く感謝して筆をぞく。

大正十三年八月

著者識







秋から冬へ……………全	斯波生×壺
マイ行路……………全	波邊菊治×二〇
早稻田の宿舍より……………全	鶴家專夫×二〇六
生活断片……………全	中島秋逸×二八
或夜の苦學生……………全	H K 生×二〇

附 録 獨學者の進路……………二二

一、大學を目指して……………二二	專門學校入學者檢定試験……………二七
	高等學校入學資格試験……………二〇
	大學理科……………二〇
	專檢と高檢を施行する學校……………二二
二、高等文官を目指して……………二四	高等試験……………二四
	高等試験令……………二七

苦學する者へ 目次

第一編 苦學への途上……………一
一、貧しき者は幸なり……………一
二、救貧の爲に……………六
三、より偉大なるものに自己自らを……………二
第二編 苦學に就ての諸問題……………一八
苦學生と品性……………一八
意志の諸問題……………二五
一、あくまで強く……………二五
二、自助と獨立……………二七
三、失望の否定……………二九
四、無頼……………三二



資本主義の悪弊と苦學界の恐慌……………三

苦學生と職業問題……………三

一、苦學生としての職業條件……………三

二、苦學生の職業……………四

1、精神的職業……………四  
事務員……書生……家庭教師……寫字生……筆生……翻譯  
 ……外交員

2、純勞働的職業……………四  
勞働……新聞配達……牛乳配達……人力車

3、販賣業……………四  
夜店……ふき豆屋……納豆賣……うどんの賣子……甘酒屋  
 ……ワンメン屋

4、技術的職業……………五

5、新味ある共同經營……………五

6、夏季休暇の利用……………五

職業の専門化……………五

高等試驗資格認定試験……………一六〇

三、高等教員を目指して……………一六一

四、判任文官を目指して……………一六二

五、獨學者が直ちに入學出来る學校……………一六三

苦學する者へ 目次終り



苦學する者へ

# 苦學する者へ

治外山人著

## 第一編 苦學への途上

### 一、貧しき者は幸なり

境遇に妨げられて大なる事業を成すこと能はずと嘆ずるもの多し。それ等の多くの人々に告ぐ。卿等はその境遇の拘束と戦ふも亦一の大なる事業に非ずや。初めに志されたる事業よりも、より大なる事業に非ずやと。

——生田長江著文藝評論より——

その言、誠に宜なるかな。今日の若き人々、稍もすれば他を羨み自己の不遇を啣



ちて、恨みを天に歸せんとする、その女々しき沙汰の限りである。愚痴や、泣言を並べる前に人は先づ、愚痴や泣言を並べなければならぬやうな境遇に打勝つてゆかねばならない。そしてその境遇に打勝つべく力める努力が既にその人にとつては一つの大きい事業であり、喜ばしき闘ひなのである。

自分は學資がないから勉強は出来ない等と嘆ずる勿れ。學資があつて勉強するなら誰でもする、學資なき境遇にあつて、なを勉強し得るものこそ眞に偉いのである。既に學資なく、なせ勉強が出来るか——而も出来得る處に人一倍の勞苦を要する。全く簡單ではない。而し、飽くまでも人生は闘ひである。境遇と闘ひ／＼輝やかしい華やかな未來を臨んで突撃する處に生甲斐がある。境遇の重荷にへこたれるやうでは最早その人は人生の落伍者であり、敗残者である。闘ふべき何物かがあるからこそ、人間は夜の明けるのが楽しいのだ。物足りない境遇にあるからこそ、人は働かねばならないのだ。働かなくてもよいと云ふ人があるならば、その人は最早目的

なしに生きてゐる蚯蚓の類と同じく一日を動いて過してゐるのである。

より多く働くべき境遇を持つ人こそ、眞に幸福ではなからうか。今更

うきことのなをこの上に積れかし

限りある身の力ためさん

と云つた雄々しき古人の言が慕はれる。

斯くして自己の境遇を味ふ時、吾等は自分の貧しいとか、不幸な境遇におかれてあることに或力強さと、喜びを感せずにはゐられない。幸ひにして、吾等は闘ふべき多くのものを持つ。食ふことの一事に蹉跎とする世人をよそに吾等はなほ勉強の重荷を背追つて浪荒き人生を徒渡る勇者である。成程、苦しいには違ひない。

而し、この苦しさの中にこそ、涙のにじむ喜ばしさが見出されるのだ。眞の幸福は眞の悲哀の中にあると云つてゐるが、山の麓に立つてゐる人は、山の麓にゐる氣分しか味はれないし、山の中腹に上つた人は、中腹から眺めた景色しか味はれない。



その如く山の頂上に險路峻坂を顧みて汗を拭つた人は始めて、未だ他の味ひ知るこ  
この出来ない喜びを知ることが出来るであらう。

學資なき吾々は幸福である。吾等は學資なきてふ境遇と戦ふべき一の大なる事業  
を有つ。

本を買ふ金がないから勉強出来ないと悲観するものは、生れなをして資産家の父  
を持つがよい。暇がないから勉強出来ないと弱音を吐くものは「勉強とは何んぞやい  
と、も一度手を胸に置いて考へる必要がある。愚痴を止めよ。泣言を廢せよ。幾等  
考へて見ても吾等の現在は本を買ふ金と、本を讀む暇を與へられてゐない境遇なの  
である。そして斯ふした、物足りない境遇と四つに取組んで、必死で戦ふ處に吾等  
の人物は大きく磨かれてゆくのではないか。そして、財布の底を叩いて買った本の  
數は少ないにしろ、一日の勞苦に疲れた身体になほ餘力を見せて、小暗い燈下に讀  
んだ頁の數は少ないにしろ、この火の出るやうな眞劍味の中にこそ、眞に偉大な人

物を造るべき活學があるのではないか！

面小手着けた十年の稽古よりも一日の合戦に生死を賭して覺れた劍術が強味があ  
ると云ふのも、疊の上で習つた泳ぎが役に立たないと云ふのも、道場と戦場の相違  
とか、疊の上と海の中との相違だと云ふ以上に、眞劍味の相違が伴ふ結果である。  
疊の上で十年稽古したと云ふ泳ぎが、何の値打もない如く、一万冊讀書したと云ふ  
人の學問が時によると何の價値もない場合がある。讀書の數で人の偉さが決るなら  
昔からの偉人英雄は殆んど歴史に名を残すことは出来なかつたに違ひない。渡邊華  
山先生も、二宮尊徳翁も物の數ではなかつたらう。リンホルンも終ひに平凡な人間  
だつたに違ひない。而し、人間が偉くなるのは本の數を讀むこと、たゞそれだけで  
はなかつた。偉くならうと心掛ける、その自分の貧しい境遇を支配し、打勝つてゆ  
く眞劍なる努力そのものであつた。書籍代の乏しきことを嘆く勿れ。讀書の餘裕な  
きを悲しむ勿れ。血と汗の結晶に購ひ得た一冊の本は、徒らに著書を遊戯視するも



の、万卷の多きよりも價值あり、内容あるものを……。多忙の中から得た寸刻の眞剣なる讀書は、安樂椅子に倚つて暇つぶしに讀書する人々の五十年にも増して人格完成の血となり、肉となるものを……。否、斯る眞剣なる人々の體驗そのものが、力強き不朽の名著そのものであるべきだ。

「貧しき人々よ！幸ひなるかな」と、吾々は云ふ。貧しき自分——何と云ふ、闘ふべきなを多くのものを持つ雄々しき言葉だらう！

苦學の首途に吾等は先づ自己の境遇を悦ぶ。

## 一一 救貧のため

「貧乏人の子は學校等行く必要はない。」斯ふした言葉は大正聖代の今日、なを田舎の頑迷なる人々から容謝なく聞かされる言葉ではないか、此の言葉が直ちに、貧乏人は知識を磨く必要ながいと言ふことを意味するならば、吾々は深く悲しまざる

を得ない。頑迷なる因襲思想は根強くも之等の社會を支配して、物質に恵まれず、更に知的に餘りにも貧弱なる無産階級社會はいよ／＼プロ階級としての悲哀を味ふのではなからうか。

貧しきことの侮辱——それは最も恐ろしいことである。その人が豊富であるか否かは物質の多寡は問題ではない。精神のいかに豊かなりや否やが問題である。心の貧しきもの——これこそ最も憐むべき貧乏人である。百億の財を積むも、心の貧しきもの何の富ぞ。疏食を食ひ、脛を曲げて之を枕とするも、心常に安易なるもの何の貧ぞ。貪富の尺度、財か？非ず。豊かなる精神の有無こそ、唯一の尺度である。

裸——何と言ふ力強い言葉だ。裸になつて悠々濶歩し得るもの、裸になつて餘裕悼々猶貧の何ものなるやを感ぜざるもの、之程豊かなる富の所有者があらうか。資産家宜し。財物の所有可なり。たゞ、裸かになることを恐るゝ富の所有者程、貧しきものはない。而も之にも増して、物心共に貧しき程の貧乏人が亦とあらうか。



心の富こそは人格涵養の賜である。而して、人格の涵養は、知的教養乃至感情陶冶の成果であり、之等の大部を基礎づけるものは今日学校教育の重任である。

『貧乏人は學校等行く必要はない。』一体、何處から割出した贅言ぞ。斯ふした無知なる思想は、端なくも社會をして不合理に陥らしめ、無産階級の生活苦をして益々大ならしめ、終ひに彼の無智は彼自身の墓穴を掘る愚を來すものである。

貧乏人を救ふものは、貧乏人自身であらねばならぬ。社會問題の焦點は、一に無産階級をいかに救護すべきかの問題である。而も、この問題を解決すべき當面者は無産者自身であらねばならぬ。

いかに現在社會に於ける無産階級者の汗と肝の多きことよ、そして、この終日孜孜營々、苦汗の結果として生るゝものは何であるか。たゞ、明日のパンの憂ひを就寢の夢に残すのみである。苦汗の果實は別に、有産階級の享樂の具となり、儂なくも歡樂の夢と消えゆくのではなからうか。少數資本家達の口腹を充すために、手足

の如く——然り機械の如く働かねばならぬ人類の大部——社會は今不合理の頂點にある。而もこの不合理を絶叫して、社會組織を圓滿化し、所謂、無産階級の苦汗をして意義あらしむるものは、彼等自身を自覺にまで導く知である。

現在社會に於ける無産階級は、物質上の缺乏を感じてゐる以上に知の要素を缺いてゐる。

パンの豊富を求むる前に、先づ知の豊富を求めよ！知に目醒め、理に覺る時、始めて、無産階級自身の中から救済の實は擧げられるであらう。貧乏人こそ知識を磨かねばならない。次第に重大化しつつある社會問題解決の先頭に立つものは、世の何人でもない。無産の徒自身である。そこに勉學の要がある。而も、苦學生としての自己がある。人類愛の絶叫のために、先づ吾々自身苦しまねばならない。解決の唯一武器——知的豊富を圖らねばならない。

貧乏人の子等よ！御身等の責務は重大である。苦學する人々よ！御身等の責務は



更に重大である。祖國大日本の善美なる建設は、小さな、而も大部なる吾等の群の中から常に孤々の聲が擧げられるであらう……。

全ての不合理は知識ある人々の解決によつてのみ圓滿に合理化することが出来る。盲目なる輕擧がいかにも良民をして悲しむべき結果に陥らしむることか。今、社會は諸種の問題によつて惱殺されてゐる。勞働問題にせよ、農村問題にせよ、將亦、差別撤廢としての水平運動にせよ、すべては、無知なる而も大部なる民衆に對する自覺ある少數者の警告である。

勞働者よ目醒めよ！農民よ目醒めよ！そして、特別なる少數同胞者よ目醒めよ！と、時代の警鐘は乱打されるが、さて、目醒めるために吾々は何を要求するか？それは、善良なる思想を誤りなく批判するの知だ。この知なくして、警鐘に驚く時、愁れにも恐ろしき群衆の輕擧が生れる。勞働問題と、農村問題と、階級の諸問題、そして現今社會の急務たる救貧對策——全ての解決のために民衆は知識を取めねばならぬ。

そして、苦學生等よ！諸君は之等重任ある民衆の代表者である。

### 三 より偉大なるものに自己自らを

自己の境遇を先づ識し、而して、自己の周圍を凝視して、遙か先方にまで鞭打つた。さて、吾々は、より偉大なるものに自己自らを創造しなければならぬ。

苦學の一日、その一瞬にも間斷なき人格創造の果實がある。苦學の一日、それは未來に於て描かるべき位階動等、若しくは地位の奴隸として無價値に費さるべき現在の徒らなる勞苦ではなく、間斷なき自己創造に於ける目的としての價値あり意義ある努力そのものである。將來得らるべき地位の犠牲ではなく、將又、目的を豫期しての手段ではなく、勞苦自身、既に歡ばしき創造であり、自己建設に於ける唯一目的の内容である。



人は常に人格創造を人生の唯一目的とする時、現在の行爲が全て意義ある努力となる。現在そのものが幽久なるものを内容として重大視される、その時こそ、苦の一字は主觀から遂放されて、いかにも苦しきものに見え、或は、いかにも徒勞なる消耗の如く見える事すら、彼の意義ある歡ばしき一日を形成する。

吾々は、苦學すること、その一瞬をも人生の意義によつて價値あらしめたいものだ、高位高官になること——そうした目標を定めて人格創造を意義あらしめることはよい、而しこの儚なき目標を唯一の頼みにして、このために苦學を手段とするものは、高位高官を得る一瞬の淡き喜びのために、永き人生は犠牲となり、いかにもつまらなき勞苦を知つて、自己の悲しき現在を見出すであらう。斯る人々にとり、學ぶことは最もいとほしき徒勞であり、たゞ、高位高官を得る日の夢にも似たる期待のために餘儀なくされた、罪人の釋放される日を待つための苦しき其の日其の日であらねばならぬ、名譽若しくは、地位に鞭打たれて働く憐れむべき人々である。

一事一物を自己創造に於ける意義ある努力とする時、人は自己の求むるものに最大の幸福を感じる、算盤によつては到底表はし得ない歡びと價値を意識する、その時こそ、全ての苦しきことは、その人にとり歡ばしき事實となり、世の言ふ苦學はその人にとり何等の苦痛をも伴はざる、否、如何なる苦痛をも喜びとして味はひ得る境地にまで達するのである、此處まで來て始めて學ぶことに意義がある、苦學は永續する、苦學生の一日は幸福である、苦學生の人格は高潔であるべきだ。

吾々は如斯く、より偉大なるものに自己自らを創造して行きたい、苦學の一日をして、斯くの如く意義あらしめたい、然らば、吾が徒よ、名譽と權勢に従ふ前に、先づ自己に従へ！幻の如き欲望に従ふ前に、先づ眞實なる自我の叫びに従へ！反省と自は人格の内容である、反省には感謝があり、自發には幸福がある、全ての人類が一日をして斯くあらしめたい如く、更に以上に重荷を二重に負ふ吾々苦學生は如斯き感を痛切にあらしめたい。



永遠から永遠への苦學——それは單なる學校生活に於ける自活勉學を意味するのではない、創造が人の最大歡喜を意味する如く、學ぶことそれ自身が彼の追求であり、生き得る滋養物でもある。この間斷なき追求が人生の姿であり、一貫したる人生が苦學であることを悟。時、苦學を拒否して生活のないことをも知らねばならない、そして、一般的に呼ぶ苦學と云ふものが、決して將來のために造られたる、一現在ではなく、それ自身、永遠の内容であり、人生の最大目的に徹したる現在の行動であることを知らねばならない、そこで吾々は云ふ、苦學は年齢と期間と境遇を超越して立つ生き行くもの、必然的姿であると、年齢によつて學問を云々するは最も愚である、而も、この愚によつて社會の多くが支配されることは誠に悲しむべき事實だ、世の中はよく眞劍なるものを笑ひたがる、而も、笑はれて尻込みするものは未だ眞劍なるものとは云へない、笑ふものをして笑はしめよ！否、笑ふものを笑へ！そこに徹底がある。

亦、勉強は期間を超越する、たゞ或年限間に或る課程を實現しようとする所に規則的若しくは有限的人生の一面はあるが、實現出来なかつたと云ふことが、その何ものをも意味しない、よく社會は落第を重大視するが、落第を重大視することは營養不良にある鶏が卵を産まないこと、若しくは、好い卵を産まないことを難するやうなもので、鳥は黒いと云ふことをさも知つたらしく廣言するに等しく、落第生を嘲笑するものは、彼自身の愚を陳列するものであらう。なぜ？ それはなぜ落第するかを考へれば極めて明瞭である、怠惰か、低脳か、不遇が、怠惰なるものは勤勉を要する、低脳なるものは牛歩的忍耐を要する、そして不遇なるものは彼が二重に重荷を背負つてゐる證據を擧げたるに過ぎない、共に必然の結果である。

落第者よ！威張れ！但し、吾々は落第者が落第に悲觀して廢學するが如き情けな態度を、衷心憐むと同時に、この餘りに當然なる事實をも一種の恥辱として發奮する程の意氣地に隨喜するものである。



最後に勉學は境遇をも超越する、富有なるが故に乃至、貧窮なるが故に等と云ふ言葉を用ふることはそれ自体、金錢に支配されたる社會に住む人々の迷言であつて少くとも金錢を支配する人間の用ふる言葉ではない。

人生の意義を辿る時、人は先づ赤裸々にならなければならぬ、それは、金錢や地位を放棄する意味ではなく、あるがまゝに煩はされざる自己を見出すことである。富有と貧窮を問はず安逸は人間の敵である、社會はよく富有と安逸を一所に考へたがるが、富有は安逸の誘惑者であつて、弱き人間が富有なる境遇に於かれる時直にこの誘惑に左右される、この魔物と戦つてよく安逸を拒否するもの、換言すれば、富を得て尙且人格創造に於ける間斷なき努力を忘れざるものは最も誘惑に勝ち得る強き人間である。

若き者よ！ そして富有なるものよ、富をして富のまゝあらしめよ、物質と地位の着物を脱げ、赤裸々なる突喊——そこに自己創造がある、人生の平等に徹する最

も喜ばしき境遇と眞實なる自己がある。

富有なる若き人々よ！ 吾等苦學への途上に君達にも亦參列を要求する、苦學は貧困者の餘儀なくされた境遇であるかも知れない、而し、物質と、地位と、境遇を超越したる人生一律の行路を凝視する時、苦學は普遍なる生存者の歩み行く姿であるそれは、より偉大なるものに自己自らを造りゆく營みである。

第二講 苦學の偉人の奮闘



## 第二編 苦學に就ての諸問題

### 苦學生と品性

「恒産なきものは恒心なし」と、孔子も言つてゐるが、一方に生活の重任を背負つて、常に經濟的壓迫に心身を勞する苦學生にとつては、餘程の注意を拂はないと、稍々もすれば品性の墮落を來し易いものである。從來、苦學すると云へば殆んど東京の苦學生を意味してゐるが、この大部のものが目指す東京は、勉學を志すものに最も便宜なる設備が充實されてゐると同時に、之に反して墮落し易き誘惑物も遺憾なく備へられてゐるのである。折角、青雲の志を立て、故郷に錦を着て歸るべく出郷した血潮に燃ゆる意氣ある青年も、一步を誤れば最早濟度し難き人間となり、故郷に錦を着飾るは愚か終には社會の忌彈すべき無頼の徒にまで墮落してしまふの

である。苦學したがために却而品性を下落するやうでは誠に悲しむべきことである。東京には、いかに不良少年少女が多いか、これ等の少年少女は始めから決して不良味を帯びたものではなかつた、その多くは、皆んな美しくしい志を立て、何物かにならうと發奮一番故郷を後にはる／＼上京した連中である。そして、之等不良少年、乃至青年の大半が、元を正せば苦學生であると云ふに至つては、吾々は仲間の爲めに最も遺憾とするのである。なせ、こんなに墮落し易いかと云ふ原因には、生活の問題だとか、土地不案内による結果だとか、友人の關係だとか、或ひは其他色々な理由はあらうが、結局は最後に於ける意志の薄弱が禍ひするのである。成程故郷を離れて苦學でもせよと云ふ程の者は人一倍に意志も強固なものには違ひない。親、兄弟、友人、乃至周圍の人々が、「東京は誘惑が多いから中々苦學等は出来るものではない、餘程、氣を付けないと却而墮落するから」と云へば鼻であしらつて、餘人はいざ知らず自分だけは決してこんなことはない、必ず初志は貫徹して見せる



等と大言する程の自信ある者でも、いよ／＼東京に来て苦學を始めるとなれば、色々な環境に支配されて案外脆く落城する場合が多いのである。田舎であつて考へる様に簡單なものではない、殊に、社會が次第に生活問題に煩はされて、たゞ食つてゆくことすら難かしくなつた今日、其上年齡も充たない者が、もう一人前餘計の働きをしなければならぬのだから、淺蕩な考へから着手したのでは、とても出来る仕事ではない、充分な覺悟と、決心なくしては、却而一生を誤る破目を來すものである。近來苦學生と云へば墮落生位ひに見溢びられるやうになつた事は、是等一部の輕卒漢が齎した罪であつて、斯る人々が苦學生の自重を忘れて、品性の劣惡を極めたる結果は、苦學生に對する社會の同情を失ひ、影響は善良なる人々にまで及ぼして、益々苦學を困難ならしめてゐるのである。昔、苦學生と云へば、社會は意氣に感じて、陰に陽に諸種の便宜を與へてゐたものが、近頃では苦學生と云へば善いも悪いも一しよくたに墮落生位ひに毛嫌ひされて、排斥こそすれ、歡迎等は更にしな

い有様である。偶々苦學生を歡迎するものがあれば、それは、苦學生を食ひ物にする連中位ひなものである。近來、苦學が困難になつたと云ふ原因は生い難だとか、職業難だとか、云ふ以外に苦學生の品性低落によつて社會の同情を失墜したと云ふことが裏面に於て大なる原因をなしてゐるのではないかと思ふ。

斯くして、社會は苦學生を歡ばず、苦學の志あるもの自身も、苦學と云ふことに或恐怖を抱いて、遂には苦學と云ふことが不可能と云ふ觀念をさへ持つやうになり次第に苦學實行者の減退してゆくことは單に一個人の不幸ばかりではなく、社會全体から考へて眞に憂ふべき現象である。

吾々は、現今苦學難の原因をたづねて諸種の救濟施設を要求するものであるが、之等の諸問題を解決する以前に、先づ、苦學生自身の品性回復に努力しなければならぬ、一苦學生の品性下落は決して一個人の問題ではなく、苦學生全体に及ぼす問題である。世にはよく目的のために手段を撰ばすと云つて、結果さへよければ途



中はどうでもよいと云つた風に解釋するが、之は目的觀を誤つた甚だしき誤謬である。苟しくも間斷なき人格創造に人生の目的を立つる時、吾々の一舉手一投足も目的に支配されたる行動であつて、一行爲すら、未來に撃る目的のための手段ではなく永遠に撃る刹那の目的それ自身としての行動であり、一舉手一投足が直ちに人格創造を支配する意義ある行動であることを思へば、一舉手一投足も眞實に徹する努力そのものでなくてはならない、如斯觀察すれば全ての手段と稱するものは畢竟目的の内容であつて眞實なる意味に於て手段と云ふ言葉は認められないわけである。彼の目的が眞實を要求し、全を希ふ處にある以上、手段を撰ばずと云ふ行爲それ自身、彼の目的を裏切るものであつて、手段を撰ばざるものが目的を遂行する道理はない、既に眞實の自己を偽るものである。學者になる、軍人になる、政治家になる、之は單に人が人格創造の目的遂行のために自分の性格に適應して採る生活様式であつて、學者になること、若しくは政治家になること、それ自体が人間の最大

目的ではない、人格創造を圓滿に行ふために各人が要求する適材適所であつて、人生の目的は、人格創造が主であつて、學者になること、軍人になること、それ等は従たる問題である、結局手段を撰ばずと云ふ行爲は従たるものを満足さすために主たるものを傷けるものであつて主客轉倒の甚だしきものである。而も、この結果は社會的に幸福らしくは見えるかも知れないが、その人自身にとつては歡びの最上なるものではない、否、不幸と云はねばならぬ、何となれば、彼は彼自身、自己眞實の要求を偽つたからである。

苦學生も亦、人間である以上此純理に立脚しなくては嘘である。苦學の刹那も亦人生の目的に合致する行動であつて、その刹那が、カントの無上命令に從順なる努力であり、孔子の良心に恥ぢざる行爲であり、釋迦の佛性に歸還する行爲であらねばならぬ、假りに苦學生が或資格を得るために勉學するとしても、資格そのものは活動の目標であつて、この目標に近づかんとする努力の中に人格創造を意



識する人間の最大目的があるのである。或資格を得た時、人間の目的は盡きるのではない。今、健康増進のために登山するとする。此の人の目的は健康であつて、山の頂上ではない、山の絶頂は目的たる健康増進を企てるための一の目標に過ぎない。然るに若し、此の人が健康を無視して登山したとすればどうか、健康に適應した加減よき登山をなさないで、無暴なる登山をなして頂上に達したりとすれば、必ずやその人の健康は破壊さるゝに違ひない、斯くては唯一の目的たる健康増進のための目標とした山の頂上には達し得るが、眞の目的たるや根本より破壊さるゝ結果を招來するものである。この人にとり目的は飽くまで健康増進であつて、登山そのものではない。而し、社會には山の頂上をのみ望んで健康を顧みないものは可成に多いことである。

吾々は云ふ——資格は人格創造に於ける人間の活動を有義ならしむる一の目標であつて、目的それ自身ではないと、吾々は、吾々の刹那——を反省と自發により

人生の意義に合致させたいものである。殊に苦學生は二重の重荷を背負つて立つ社會の勇者である。襲ひ來る誘惑と戦ひ闘ひ人生の目的に突撃する時、そこに三重の重荷がありはしないか！そこに吾々の勇氣は更に百倍する。吾が同志等よ！苦學は簡單ではない、而し、へこたれるな、この重荷を背負つて立つものゝみよく大を成し得るのだ。

### 意志の諸問題

#### 一、あくまで強く

苦學生が持つ失敗の最大原因は、自己の立場を同情してもらひたがる弱き心である。同情は求むるものではなく、與へらるゝものである。而も、與えらるゝことを豫期することそれ自身、自己を侵すものだ。苦學を賣物にする女々しさは多くこの



同情を求むる弱き心に因を發してゐる。苦學すると云ふこと、それはいかにも美しいことだ、而し、苦學生自身、苦學することを社會に對して誇るべき何物があるか、苦學することは、彼にとり餘りに當然なる境遇である、彼自身求めたる境遇であつて、社會が特に依頼したる境遇ではない、苦學生だからと云つて特に同情される理由は毫もない、只、常人以上の重荷を背負つて立つ此の眞劍なる態度に讚美と同情を以てすることは人情の自然であるが、同情することが彼の義務ではない、同情さるゝことは寧ろ必然の結果であるかも知れないが、この必然の結果を豫期して同情さるゝもの自身が之を要求する時、人情の美は根底から覆がへされ、美德は惡德にまで化するのである。

苦學と云ふ名辭すら、社會が彼に付すべき名辭であつて、彼自身、自己を稱すべき名辭ではない、彼自身にとつては飽くまで歎ばしき争闘の生活であるべきだ。吾々は、吾々の仲間が日常の冠頭語に、「苦學生ですから」と云ふ言葉を用ひる人々の意氣を合致せしめようとする。

毎に云ひ知れぬ惡感を抱くものである。眞の苦學生には此の言葉は全々不必要である此の言葉を叫びなればやつてゆけないやうな徒輩があるとするれば、彼は眞の苦學生ではなく、苦學を看板に生活する一職業者に過ぎないものである。吾等の憤怒と大蛇は先づ彼等の頭上にかゝらねばならぬ。

飽くまで強く生きよ、稍ともすれば人間は安價なる同情を求めて自己慰安を満足させたがるものである。斯る態度は既に自己の境遇に降伏したるものであつて、闘ひから闘ひへの人生に脆くも落伍したる人間である。

二、自助と獨立

昔の苦學界では、苦學生が知名の士に見込まれて成功したと云ふ話がザラにある昔の苦學生が眞劍であつただけ、此の苦學生を捨てゝは置かない名士も少なくなはなかつた。苦學生と名士——斯ふした因果關係は可成に深いものとなつて苦學界を飾



る一ロマンズとまでなつた。意氣ある人生に於ける美しくしき情話ではある。然るに、斯ふした自然に生れた人情美を、故意に形成せようとする處にはかなき苦學生の夢があり、苦學界の情落がある。勉學に忠實と云ふよりも、僥倖的一ロマンズの主人公になることを夢見て頼りなき努力を續けるものさへある。全てが夢の如き時代にある苦學生にとり斯る架空的想像は寧ろ當然かもしれないが、之は戀て、苦學することよりも苦學生振ることに忠實なる所以である。最後に於て、自家廣告をする醜態にまで到達する。こんな意氣地なしの苦學生に一肌脱ぐ程の馬鹿な名士があらう筈がない、苦學生が苦學を賣物にすればする程、社會から見離されて行くのは當然の理である。

このオシスにも似たる架空的想像を先づ打捨て、かゝらない限りは、眞に所志を貫徹することは不可能である。この幻影こそ、苦學界に横はる恐ろしい魔物でなければならぬ。

依頼心は人間を最も卑屈なものにする。自助と獨立は當に闘ふもの、旗印であるべきだ。自己の全力を常に發揮するものに何の問題があらうか、それ以上のことを求める時、依頼があり、無理があり、卑屈なる態度がある。人は自分の子を生むのみだと先人も云つてゐる。

自助と獨立——この精神こそ、人の存在を明かにする城廓であつて、この精神を失つたものは城を明け渡したる城主に等しく自己の存在を占領され、若しくは放棄したるものである。

三、失望の否定

眞なる意味に於て、時間の空費と云ふことはあり得ない。いかに無駄な時間の如くに見えても必ずや無意義なる消費とはならないのである。而し、強ひて時間の空費がありとすれば、それは、愚痴を並べる時間と、悲觀失望に費す時間とであらう



人は自己の眞實なる意志に従つて行動する時、目的觀が浮薄なる名譽や地位に無い限り失望し、悲觀する餘地はないのである。人生の意義は成否の心配ではない、出來得る確信の下に努力する喜ばしき争闘である。何が出來得るか、無形なる人格創造に於ける發展意識である。そして、それは直ちにの問題ではなく、永遠若しくは無限の超時間を前提としての問題である。出來る、出來ないそれは問題ではない永遠なる努力によつて成し得るてふ信念の下に努力する刹那／＼が意義ある生活である。無論、こんなことを考へなくても生きてはゆかれる。而し、斯くの如き信念に生活する時、生活から悲觀や失望が除去されて、雄々しき活動の人生が見出されること云ふに過ぎない、いかにも人生が意義あるものとして生きてゆかれるのに過ぎない、而も、斯る觀念が、宗教に思想に人間の深刻なる叫びとして常に人類の根底を流れてゐる處より見れば、人間の生活としては、やはり斯ふした信念に生きるこそが眞實のやうである。古來、大をなし得たものは全て大なる信念の所有者であり

大なる信念の所有者に失望の跡が見出せない所より見れば、吾々は眞實に生き得るために、やはり宗教的解脱觀から來たる一大信念を必要とする。大事に望んで泰然たる處置をとるの態度は此の信念なくしては得られない處である。失敗、成功が眼中に重大視せらるゝ間、人間には失望や愚痴から解放されることは出來ないであらう。

人生多難、日常鎖事多し、苦學生の一日亦易々たらず、吾々は此の煩鎖浮沈を超越して悠々艱難と戦ふために、無意味な徒勞たる失望を否定し、宗教の教ふる一大信念に就くの要を説く。

#### 四、無

一旦、洋服を着たるものが捻鉢巻をすることを恐れるやうでは、浮沈多き世の中にあつて自在なる活動は出來得るものでない、三軍を叱咤することゝ、風呂屋の三



助をやることが、眉毛一つ動かさずにやれる人間でなければ、徹底した仕事はやれないであらう。傑物桂小五郎も時機通つては菰を着て物乞ひをしなければならなかつた。大關秀吉が偉かつたのは、機略縦横人を制するの機智ではなく、草履取りを平気でやつて除けた如く、六十四州の號令を易々としてやつて除けた處にある。彼は、いかなる境遇をも支配し得た偉人である。一万圓を持たせれば、好く利用するが、十萬圓を持たせれば、もう利用する力を持たない等と云ふ底力のない人間ではなかつた。

物の上手下手は別問題として、時期通つてはいかなる職業も無頓着裡にやつて除けられる幅廣い人間になることは全てのものに必要である、殊にそれ等の機會に遭遇し勝ちな苦學生にとつては更に痛切なるものがある。今日はペンを持つて居れば明日は鶴嘴を持たなければならぬこともあらうし、洋服を法被に着替へなければいけない時もある。袴を脱いで直ちに車のカチ棒をとらなければ生活の出来ない場

合もあるし、勞働者の下働まで汗水たらした明る日は官廳や役所の椅子に何喰はぬ顔で事務を探る場合にも遭遇するであらう。之等千變万化の間に處して無頓着にやつて除けられる心掛が常、必要である。而も、此の間に往來して、各職業者共通する悪弊に染まず、常に高潔なる心事を持つるは要するに意志の問題である。職業そのものには貴賤はないにしろ、彼等グループに於ける行爲乃至思想のものには各々差別と特長がある、純心を傷ける誘惑もある、表面いかに彼等になりきるにしろ、最後に於ける堅實なる精神は飽くまで固持せねばならない、蓮の泥土に生ひ立つも尚、純なるが如く……。どんなに勞働者風をしてゐても、苦學生は直ぐはかると云ふことを時々耳にするが、之は誠に喜ばしいことである。世間にはよく氣品があるとか、ないとか云つてゐるが、このごことなく其はる氣品が心事の高潔か否かを語るもので、斯る氣品こそ望ましいものである。草履取りはもたが、草履取仲間が持つ惡風には感化しなかつた。草履



取りをするそのことが、既に未來に於ける天下取りの内容となり、血となり肉となつて、無駄な消耗ではなかつたのである。草履取りに於けるこの眞剣振りには、彼の六十餘州に號令したる氣概そのものであつた。たゞ、高潔なる心事と、高遠なる理想を常に忘れなかつたが故に、社會は彼をしてより多く力を發揮し得べき地位に置いたに過ぎない。草履取根性になりきるものは、彼が草履取を以て適材とする證據である。而し、草履取根性になりきれなかつた處に、彼が天下取の根性を有する、所謂、天下取を適所とする天性を有してゐたのである。否、草履取と云ふ一小範圍の型にはまらなかつた處に、彼のいかなるものにも成り得る普遍さと、自在なる活動を有してゐたのだと思ふ。

此の徹底したる無頓着さ、自由さ自在さがあつてこそ、いかなるものにも固定しないと同時に、いかなるものをもやりきる可能性があるのだ。

### 資本主義の悪弊と

#### 苦學界の恐慌

苦學生の半分の重荷が、金銭——物質といふものにかゝつてゐるため、金が權威を逞しくする世の中は苦學生にとり誠に都合の悪いことである。金が物言へばいふ程、苦學生の脚下は危いものになつてゆく。金の有無を、多寡で資格を決定したり人物を批判したり、あらゆるものに定價を付する今日、無一文の苦學生達は最も不利な立場にある。資本主義の社會が發展すればする程大恐慌を來すのは苦學生である。意氣や人情が姿を隠して、何もかも金銭第一から算盤を弾くので、職業に不熟練、そして、時間に要求を持つ苦學生は、先づ就職難に困らされる。こんな端役者は何處へ行つても歓迎されない、苦學生救済等の美名を説く前に、彼等雇主は財布の重くなる算段に骨を折るであらう。次に困らされるのは住宅難だ、地價が上り



地代が騰貴する今日、汚ない家を建て、安く貸したのでは家主自身が恐慌を來すため、貧乏家主は最早辭職しなければならぬ。資本家は彼の金庫を肥やすため、家賃の安いやうな家は建てない、建てても家賃だけは値上げする。平均三層の時代で一室三疊より少ない部屋は先づない、間代だけで九割を要するわけだ、貧乏苦學生だから一間に三人も飛び込むか、そんな甘いことは貸す方ではさせないから心配は要らない。その三疊の部屋さへ減多にない仕末で、最も多いのは六疊である、一室六疊は勿体ないが、幸ひ友達でも居れば兎も角、一人で借りるとなれば、安い月給は間代になつて仕舞ふわけである。

就職難に陥らされ、住宅難に困らされ、斯くて生活は大恐怖を感じた苦學生が、どうなり一つの重荷を形付けて、さて目的の學校に目を向ければどうか、此處にも資本主義の惡風は吹いてゐる。學校は資本家の子供を教育するには都合よく出来てゐるが、授業料が拂へたり、拂へなかつたりする苦學生等の便宜は一向考へてゐない

學校を昇格して金をためる方法は考へるが、苦學生に便宜だつた大學の夜學制度も下が次第に影を消してゆくのみか、授業料だけは次第に値上げされる、要するに學校も亦教育の美名にかくれた、蓄財に吸々たる一の營業者である。

職業に苦しみ、住宅に苦しみ、其上勉強に苦しむ今日の苦學生は誠に其の名に恥ぢないが、此の困難を突破して無事學業を終へてさへ、全てに順調に可能性ある程度に苦學をして、さて彼が卒業し得る學校は、他の遊學者達が悠々卒業し得る學校に比し餘りに資格を認められない場合が多いのである。成程、教育の實力は充分であるにしろ、困苦艱難に耐えた體驗は貴いにしろ、一にも二にも資格尊重の社會で、肩書のない學校を卒業したのでは斯ふして築き上げた奮闘の賜も餘りに安價なものとして取扱はれる。

斯くて資本主義の横行する社會では、苦學生に徹到徹尾苦しみ抜かれる境遇を如何ともすることは出来ないのである。



吾々は社會組織を云々するものではない、その組織が如何なる社會にしる、要するに金に根性を奪はれぬ社會が腹立たしいのである。財物に人間性を奪はれ、社會そのものが、吾々の憤怒をし、熾んに火の手を挙げさせるのである。殊にそれが、教育の重任を帯ぶる學校である場合、神聖なる教育を犠牲にして、營利中心の職業化してゆくといふことは何といつても忍び難い處である。

虐げられたる苦學生——それは、余りに永い沈黙を続け過ぎた。吾々は内部から自覺したる要求を持たねばならない。一派の知識階級の研究種や、閑人の坐談ではなく、苦學生自身の問題である。

### 苦學生と職業問題

從來苦學生が従事したる職業の種類及性質は如何なるものであるか、それ等の職業は果して適業なりや、苦學條件に適合する職業はいかなる性質のものなりや等の

問題及び今後の苦學生に對する職業問題は別に専門的に研究すべき價值ある問題であると同時に、苦學界に指針を與ふべき是非共試むべき研究であるが、著者は此の小冊の一項として、大略を述ぶるに止め研究を後日の大成に期したのである。

#### 一、苦學生としての職業條件

苦學の目的を圓滿ならしむるため、苦學生は如何なる職業を撰定すべきかは大きい問題でなければならぬ、こゝして職業を如何なる條件に從而撰擇するかは是非心掛ければならぬ事である、先づ一方に勉學の重務を持つ苦學生は、

##### 一、疲勞少きことを要する

勞働過激にして疲勞過大なるが如き職業は大禁物である。若し、過激なる勞働とすれば充分休息の餘裕ある短時間勞働でなければならぬ。

##### 二、時間の規則的なること

一日勞働の時間が正確に決定せることは通學するものにとり先づ考ふべき問題



である。この問題は五歳で解決せよといふ問題を十歳で決むべきといふ問題

### 三、収入の成可確定せよ

収入の不確定は直ちに生活に不安を感せしめるのみならず、一日は多く、一日は少く等収入不確定なる時は、稍もすれば多き時は安逸を貪り、少き時は意志を薄弱ならしむる等、苦學生の忠實を乱すものである。

### 四、精神的刺激少なきこと

身体の疲勞が苦學生にとり打撃である如く、精神的過勞も亦禁物である、理想から云へば苦學生の適業は半勞働である。

之等は選擇條件の天体であるが、苦學生の一日を通じて肝心なることは全てが規則的であることだ。少時間をも有義に消費しなければならぬ。苦學生にとり、全てが規則に支配されたる正確なる行進であらねばならぬ。而して、之を列せざる條件は、其なる理想であつて、事實は全々この條件を無視するものである。吾々は唯、一歩

にても此の條件に適合するやう方法を講じなければならぬ。

## 二、苦學生の職業

### 一、精神的職業

真務員 一般を通じて、中等程度の學校を出たものが殆ど上級學校に進むために苦學するには知識の方面から云つても、年齢から云つても、將、身体の發育から云つても相當容易に苦學を成し得る條件を具えてゐるが、最も苦しむのは、小學を出たばかりのものが苦學する場合である。彼等は身體は未熟にして、基礎學は不十分だし、其上、上級學校と連絡をこるため不利なる立場にあるため、最も困難を感ずるのである。此處に云ふ事務員も、中等程度の教育を受けたものゝ職業であつて小學卒業では相當な年齢に達しないと都合が悪い。時間は八時間制が普通で、四時には大抵終るから夜學には間に合ふ。給料は三十圓、外尤から經濟方面を甘く考へれば、給料は確定してゐると、時間は規則的だし、



精神に過勞な事務でさへなければ夜の通學者としては先づ結構な職業であると思ふ。教育制度が改善されて夜の學校が晝の學校と同程度に有利な資格を得らるゝならば更に苦學生の適業となるであらう。但し肉體勞働の勇ましさはないが、修學を企圖するものにとり賢なるやり方であらう。

**書生** 昔の書生は精神勞働の部に屬してゐたが、今の書生は寧ろ半勞働以上の勞働者であるかも知れない、或意味に於ては下男と異語同質なる場合が多い何かの關係とか、知合でもないと言生になることは一寸困難である。食ふのに心配はゐらないが、學資を償ひ得るや否やは疑問である。たとへ償ひ得るとしても、それは勞働の報酬としてよりも、施恩行爲たる場合が多い。相當な窮屈味はあらうが、名士等と日常起居する關係上、感化も多いことと思ふ。

**家庭教師** いかにも品の好い職業である相當教育あるものが舉つて希望を抱く

のも無理はない、甘くゆけば可成な収入も得られやうし、樂々と勉學が出来るかも知れない。而し、要するに富有なる家庭の馬の脚に過ぎないものである。裏面に立ち到れば決して華やかなものではない、飽くまで資本家の玩具であることは覺悟しなければならぬ。但し、之は最早教育程度の進んだものゝ職業であつて、苦學問題として取扱ふには少し贅澤過ぎるであらう。

**寫字生** 寫字生募集は毎日のやうに新聞廣告に出てゐる、効能書程に収入が得られたら面白いものだが、少しは兵糧を用意した者でない、明日の米代を心配するやうでは、うつかりはやれない職業である。殊に苦學生を食ひ者にする世の中、苦學生等の便宜のためには出來てゐないと承知してよからう。但し全部を疑つてはゐけない、社會には鬼もゐれば佛も居る。時によると眞實義侠心からやつてゐるものもないではない、單に寫字のみならず、如何なる職業に關しても、そうした美しい人もあるものだ。



筆生 寫字と大同小異の職業である、但し筆生も都合よく信用あるものを引受ける時は案外甘くやつてゆけるであらう。然し、何と云つても小手先の機械仕事だから収入等は大を望めなむと同時に、可成に骨の折れることである。開塾 塾を開くと云へば何となく勇ましい、之が都合よく開業出来るなら中等程度上の苦學生には最も好適であらうが、場所の都合、資金の都合、住民の都合等で兎角、害が多く、實現した者もないではないが、昔よりも一層困難のやうである。何等かの方法で斯る職業若しくはそれに類した職業を苦學生救済法として施設することは、苦學生の性質から云つて最も望ましいことだと思ふ。外交 名を聞いただけで保険の勧誘員や、いかもの、販賣員を想像して肌を寒くするか知れないが、それ程怖れたものでもない、外交だからと云つて饒舌でなければいけない理由もなく、嘘を並べねば商賣にならんと云つた性質のものではない。やはり外交にも正直なることは最後の勝利である。但し、囁言にし

ろ、馬鹿正直にしろ、相面を馴れた奴のいない人でないこと、一寸困難な職業であるといへばいへる。試めしに一度やつておく必要もないではない。而し外交にも色々あつて變な新聞廣告に吊られて行くこと、良心に恥ぢる行為を取らなければならぬ破目になるから用心が肝要である。

## 第二總労働的職業

労働 体力に自信あるものは一度は体験してはからう。而し、事實上暗から暗への長時間の消費は、過激なる労働から来る疲労は決して苦學生の適業ではない、親方に連れられて荒つばい労働者達と一所にゆくところ成程、苦學生といひたい妙味はある。日給も二圓内外は貰える、日曜等の利用法として時々は好いかも知れないが、要するに労働体験位ひに止るものである。朝六時までに職業紹介所にゆけば大抵アブレに心配はない、但し身体に餘程の自信がない限り



深く謹しむことだ。

新聞配達 新聞配達ならいつでもやれる程々程毎日のやうに人を求めてゐる。この新聞配達募集の多い裏面には、苦學生で新聞配達をするものが少なくなつたといふことを實證するもので、それだけ注意を要する職業である。新聞配達には或程度まで苦學生に適した職業である。而し、普通に配達をやつたのでは収入が伴はないし、かといつて収入が伴ふやうにするには全々學業を捨て、ゴロツキ的なことをやらなければ其合が悪いといふ状態にある。

朝だけ配達すれば、勞働としては程度であるが、一ヶ月十七圓や十八圓では會計が立たないし、朝夕二回の配達では二十七八圓はとれるが勉學時間の不足と、營養不良は覺悟しなければならない。そこで、方法を講じて収入の大を得やうとすれば、職業化しなければならないのだ。加之、今日の之等社會は腐敗してゐる新聞配達で眞剣に苦學等やつてゐるものは恐らく幾天に星か數へるよ

りも困難であらう。昔の苦學生といへば書生か、新聞配達かに決つてゐたが、時代は大分變つて來た。

牛乳配達 新聞配達にしる、牛乳配達にしる昔の苦學職業は、今では完全に一個の純職業化してゐるので、大部分は之等の職業で生活する者に奪はれ、最早苦學生の没入を許さざる状態である。惟ふに過去の産物で今日の代物ではなからう。

人力車 一圓もあればその日からでも、どうなり開業出来る此の職業は今日でも相當に實行者はある、鑑札は四十錢自分の居所のある警察で貰えるが、衣裳を一通り揃はすとすると、やはり相當に金はかゝる、親方の處へゆけば車は月九圓位で貸してくれる。収入は不確定だが、實收は餘程あることはある。體質さへ頑健ならやれる職業である。而し、斯ふした職業にも時代と共に秋風は立つて、人力界は次第に衰えゆく運命にある、車小屋に客を待つ玄人の顔にすら



生活苦のあり／＼と浮ぶ今日果して苦學生の職業として選擇し得るや否や、殊に、人力車の將來も疑はしいものではあるまいか。

### 第三販賣業

夜店 夜間三四時間で相當収益を擧げる手腕を自信するなら夜店は面白い、好い場所には這入れないが、親方に相談すれば兎も角も仲間に這入れる。親方はいつでも夜店に出てゐるから品物を持つてさへゆけば物にはなるのである。商品は、やはり時期に適する賣行きによさそうなるものを撰ぶより仕方がない。或ひは、一寸した發明品を造つて賣出す等は從來苦學生の試みた處で、面白いやり方であると思ふ、こんな所へも新知識の應用は必要である。

ふき豆屋 朝早く、爽々しい空気を吸つて鈴の音も奥ゆかしく過ぎてゆくものは之なん、高き理想を胸に描いてふき豆賣る苦學生である。一圓五十錢で仕込んだ三升の豆を運よくも賣盡して三圓の金を算へるとき、彼等の顔は嬉しさに

輝き悠々學にいそむことが出来るのだ、深川區石島町二四八の、原市太郎商店は仲間知られたふき豆屋であり道具も貸してくれれば、寄宿もさせてくれるから苦學への飛び入りに先づ試みて安心の出来る方法である。

納豆賣 元氣の好い聲で朝もまだ早い五時頃、納豆／＼と賣り歩く若者の姿を見る度に吾等は仲間のために意を強ふする。三時間内外の商賣だ、三錢で引受けて五錢で賣るといふ利の多い商賣で少なくとも四五十本は賣れるから一圓内外の収入は得られるわけ、朝の散歩と思へば何でもなく出来る職業である。道具は貸してくれるから元は要らない、近頃では、ゆで出しうどん屋なら大抵副業としてやつてゐるから、市内の製麵業者を訪れると、早速開業出来る。

うどんの賣子 箱車を引いて鈴を振り／＼賣り歩くゆで出しうどんの賣子は、以前は苦學生の獨り舞臺であつたのだが之も時代の影響が次第に影が薄くなつてゆく、一時は随分賣れたものだが、新業者にはせれば、もう、ゆで出しの



時期も済んだとばかりはしてゐる。雪が降るのが楽しみな程寒い商賣下、雪でも降ろうものなら寒さも忘れて、賣れ切れた空車を威勢よく引いて歸るのが此の社會である。午後から出掛ける商賣で、少し無理をすれば晝の學校にはゆかれる。プロ階級の夕食代りで、屏の高い屋敷は何時間歩いても賣れる心配はないが、車の通り兼ねる、薄暗い軒並を鈴を振り／＼ねり歩く時、うどん屋さんと呼ぶ懐かしい聲は其處此處からするのだ。夕方の商賣として一圓以上の利益はあり苦學生の適菜として幅を利かせたものだが、次第に衰微しゆくのは何と云つても借しいことである。甘酒屋之は亦、天秤棒を擔いで甘い／＼を商賣の夏向である、うまく木陰を占頭して場所の適當を得れば、肩を張らして賣り歩かなくても意外の儲けがあるといふ。本所區江車橋際の近藤製麵所ではすつと以前から賣子を出してゐるワンタン屋、夜遅く人の氣配の次第に静まりゆく時、甲高く笛の音は聞えて屋

臺車の地底をゆらく音がする、こんな時用事もなさそうだが未だ寝もやらぬ人々からワンタン屋さんと呼ばれるのだ、十一時十二時が商賣時で、夜冷えのするるのが缺点だが、二圓内外の收入は得られる。田舎の夜泣うごとと匹敵するもので、ワンタンの製法等は、この道の人に尋ねると親切に教へてくれる。

#### 第四、技術的職業

今日、技術を學べると云ふ程、生活の安定を得る法はない、藝は身を助けること云ふが、一つの技術を習得しておくことは、どれだけ生活の武器となるかわからない、或意味に於ては、一つの技術を習得した後、生活の保障を得てから學に志す方が寧ろ苦學生にとり得策ではないかと思つてゐる。殊に印刷に關聯した技術は、勞働の程度から云つても、收入の程度から云つても、最上のものである。機械工、植字工、文撰工等、各々相當年月の習練は要するが、一日三圓内外の收入を得る點に於て、全く勞働者階級に於けるキングの地位を占め



てゐると云つてはい、單に苦學の方法としてのみならず、機會を許すならば生活の安定を保障するため、たゞへその職業が將來の豫期ではないにしろ何種にまれ技術を習得し置くことは有意義なことである。

五、新味ある共同經營 金錢と云ふことに可成無頓着であり得た昔の苦學生は、苦學方法も亦物質を餘り眼中に置かない方面に探つてゐたが、近來、益々生活の困難になるに連れて、全てに經濟知識を應用しなくては到底苦學を實現することは出来なくなつて來た。最少の勞力を以て最大の効果を收めんとする頭腦が

全てを支配して、苦學の方法も亦僅少なる勞力を以て多大の効益を得んとする職業へと變移しつゝある。就中數多い苦學生の職業中之は亦、一風變はつた共同經營法で而も上首尾の下に成功したる實例があるから面白い。そんなことをやつたかと云ふに、彼等は五人で出資して、菓子店を造作權利

村居拔のまゝ約千圓で買ひ、菓子だけではと云ふので冬はミルクを兼營し、夏は氷店を兼營した、それから暫くして、一寸した洋食も始めたが、商品付で買つたのだから、兎も何其の日から商賣になる。其土、意氣ある青年達の膽立と來てゐるから、從來餘り華かな店ではなかつたが、色々と新知識の應用を試みた結果、店は次第に繁昌するし、繁昌と共に造作權も値上げて五年後彼等が揃つて學校を卒業し、いよいよ初期の目的を果して店を他人に譲つた時彼等の手には、元金を償つてなほ相當の利益を見たこと云ふ話である。五年間の經費を全部償ひ、元金を差引き尙相當な利潤を見た等、苦學の風も何處を吹のか分らない景氣だが、之等は全く賢明なる方法である。無論、最初約二百圓平均の出資が出来たと云ふことは彼等のため幸福だつたと云はなければならぬが、千圓がそれ満實が出来ない云ふものではない。其の性質により、資本の高式は、客々新知識を發揮する何ものかを捕へると云ふ處に經濟眼の輝達



した現代人としての苦學生に特長を見出すものがある筈である。而し、彼等五人の苦學生が偶然にもせよ菓子店に目を付けたと云ふことは何と云つても賢明である。

菓子店程容易に商賣が出来て而も堅實なるものは少ない。店番は一人も居ればどうなり間に合ふし、豫備資本も少なくて済む、その上相當な利益のあるもので年中多少に不拘賣れる商賣だから先づ損のない處に一大特長がある。彼等五人は今や功成り名遂げて立派な紳士となつてゐるであらうが、其の家には今でも壁に撲り書きした「精神一到何事不成らざらん」の文字が當時の奮闘振りを偲ばせてゐる。

ガマ口を開いて銅貨許りしか見出せない大部分の苦學生に、斯る實話は餘りに縁遠いことも知れないが、斯ふした共同經營がたとへ無一文のものでも孤立よりは餘程經濟的であり、亦互ひに激勵して、相謀るならば充分好果を表は

### 第六、夏季休暇の利用

しはしないかと思ふのである。

人は涼を趁ふて海を行き、山を行く時獨り踏み止つて炎天下に一層の奮勵をしなければならぬのは苦學生の餘儀なき境遇である。此の放たれたる五十日は苦學生にとり樂しき休養ではなく、一層勞苦に充ちたる苦汗の日であらねばならぬ。勞働に、行商に、露店に、いかに目醒ましき活動を續けつゝあることか、燈下親しむべき秋の讀書期をより多く勉學に利用するため、彼等は炎熱と戦はねばならぬのだ。炎天下の活動を怠つた蟻が冬籠るべき何ものもなく冷たき風に凍死を免れざる如く、この苦熱を避けた苦學生等は讀書とペンをかけたへにして來るべき年度の進級に憂き目を見る運命に遭遇するのだ。而し悲しむな、この苦熱ににじむ汗の中にこそより偉大なるものゝ造らるべき要素が充滿してゐるのだ。



素人らしい水配達が息を切らして汗だく／＼でやつて来る、頬の肉も大分落ちて色も眞黒には焦いてゐるが、學生だなど直ぐわかる。やつと五十圓位近く貯金が出来たと喜んだのは八圓も末のことだ、氷の卸問屋に配達夫として雇はれ毎日屋敷廻りをする。相當骨は折れるが之も夏季利用法の一つだ。

此處 砂煙りの立つ炎熱の大道をあへぎ／＼水を懸ひつゝ歩く時、ふと横手の雑木林の木蔭に全で別世界のやうにアイスクリームの小旗が風に翻つてゐるではないか、客は走るやうに近づくと、さて主は見えない、客の眼が八方に飛ぶ……。居た／＼！アイスクリームの主は草原に仰向玉の自由さに客のあるのも無關心に本の頁に雲を奪はれてゐるのだ。客と見るや、ガバと跳び起きた主は愛想よく先づ盛のいゝ一杯を捧げる、客は舌鼓を打ちつゝ、見るともなく草原に捨てられた本に唾を注ぐ。大學の筆記だ——今度は客の視線はアイスクリーム屋の顔に飛ぶ、次には、も一度本の方へ……そして、客は獨り合點をし

たやうに頷くと何とも云へぬ親しい微笑を洩らして、無理らしいのを餘計に一杯食つてから「御馳走さん」と、丁寧に辭儀をしてから出て行つた。

雑木林の避暑！アイスクリーム屋は三十圓あれば開業出来るのだ。

アイスクリーム屋と氷屋——溶けるが早いか、賣れるが早いか此處に盛衰の岐路がある。

### 職業の専門化

従来苦學生が試みた職業も相當の數には上るが中には最早過去のものとなつた職業もあるし、或ひは今後充分研究の餘地ある職業もある。而し、一般から見て苦學生の職業を次第に奪つてゆく原因は職業の専門化と云ふことである。能率増進と資金問題が八ヶ間敷なるに連れて、全ての職業が専門家によつて奪はれる。分業の發展は時間と能率を厳正に心時間と能率の厳正は従業者を専門化する。不熟練者や



素人は遂に放逐されるのである。と同時に、生活難は、一家族全部を職業者とし、雇主の數に比して、従業者の人數が過剰する、過剰した人數はいかなる職業をも追求する。そろ／＼と苦學生獨占の職業へも……斯くて苦學生は社會人によつて自己の適業を奪はれ、純職業者と競争しなければならぬ立場にある。而も、現今の賃銀率は純職業化しなくては到底生活の保障に困難なる情態を現出してゐるのである。

苦學適業を獨占的に新しく開拓してゆかない限りは、苦學生は遂に職業から驅逐される運命にある。

### 苦學生と教育制度の缺陷

苦學生に新しく職業を興へるか、さもなくば、現在教育制度を苦學生のために改革しなくてはならない。でなければ終ひに苦學は不可能になつて来る、苦學の不可

能と云ふことは、無資階級に勉學の機を興えないもので、學の機會均等を根本から誤るものである。

苦學生に新しく職業を興えない限り、現在苦學生を救済するの途は、夜學制度の完備あるのみである。晝間學校と夜間學校、差別撤廢、格均等、之以外に方法はない。然るに現在教育制度は全々此の状態を無視する許りでなく、専門教育制度にあつては却而反對の傾向さへ觀取するものである。近來夜間中學の設定は誠に歡ばしき現象だが、専門學校にあつては、私立大學は昇格するに連れて次第に夜間部を廢止し、今や、大學部で夜間部を残すものは一二校、過ぎざる状態である。一体彼等は何のために昇格したのだ、彼等の昇進運動、差別撤廢に於ける平等觀に出發してゐるのではなかつたか、それにも不拘、差別撤廢の美名に據つて彼等は、民衆のための大學也と誇つた自己の立場を忘れて、次第に資本主義化し、彼等の昇格はブチヂョア抱擁のための昇格であり、都下に喘ぐ苦學生を拒否し、堅く門戸を閉して



終ひに民衆は排離しつゝあるではなからか。全ての苦學進業は純職業者によつて行はれ、吾々のための學校は今や閉す。苦學は終ひに絶望に類してゐると云つてよからう。而し、失望するのは早い、大學の専門部は殆んど夜間部を設け而も最近昇格の恩恵にまで浴してゐる。之等は同志と共に深く喜ぶものだ。學部との連絡はあり、高文の受験資格も出來た、専門部のみは門戸を解放されてゐる。吾々は此の處に據つて、更に次への開拓をしなければならぬ。現在教育制度の缺陷を目して、全ての設備制度の上に晝間と夜間が同等の地位に立ち、無差別の待遇に置かれるまで吾々の叫びは盡きてはならない。

夜學中學と晝間中學の差別撤廢、専門學校以上の晝夜の差別撤廢、そして、夜間學校の内容充實、之等は單に苦學生救済の唯一なる方法である許りでなく、國民に教育の機會を普遍に與えるものであつて、國民教育程度の向上から云ふも國策の急務でなければならぬ。

吾等は苦學生救済策として、職業を云々するよりも寧ろ學校教育制度の改革により可能性を認めるものである。

### 資格主義の弊害

現在の苦學生は、適業を與えられるか、若しくは學校制度を改革するかによつて救はれると云つたが、今一つ救はれる途がある。それは、今日の社會に漲つた資格尊重の惡弊を洗ひ去つて、實力主義の社會に導くことだ。一にも二にも資格を尊重し、資格なきものは登龍の道がないため、苦學生も亦資格を要求しなくてはならぬ破目になる。全ての途中に於ける資格を撤廢して、實力で以てひた押し押し進むやうになれば、前二者がたゞへ實現されなくても苦學生の進歩は容易になるであらう。資格も或程度までは必要であるが、資格に對する社會人の盲目なる迷信は、社會の自由なる進歩を妨げ、資格崇拜は往々にして善良なる批判を誤り思想をして陳



腐にするものである。亦、爲すべきものをして爲さしめず、人材をして埋木にするだけでも損失は淺少なるものではない。

資格で戦ふか、力で戦ふか、人の最後は力に跪伏するものである。資格崇拜は要するに階級意識に於ける貴族禮讃であり、力崇拜は人間本然の叫びである。資格崇拜は小我の欲念に發した迷蒙であり、力崇拜は大我に歸した證覺である。前者は虚であり、後者は實である。資格尊重が社會を支配すればする程社會は偽瞞に充ち、空虚なものとなる。名あつて實なきもの程、危かしいものはない。博士の肩書が雨後の筍の如く増えるに係らず大なる思想も生れねば、大なる發見も聞かないと云ふのは如何に寂しいことであるか、肩書が實質を表はさずに、單に名目に過ぎないならば、そんな肩書は幾つあつたつて物の役には立たない。いざ戦争と云ふ場合に國民全体を大將にしたつて強くはならないだらう。資格に壓迫された社會程、不平の多い、矛盾したものはない。

階級争闘は要するに資格崇拜の結論である。資格尊重が極度に達する時。民衆が色採を濃厚にするのだ。思想は悪化し、人心は動搖する。眞に敬服しないものが暴力を振ふ時、追従者は遂に彼の牙を尖らして抵抗するのは當然である。學校昇格誠に結構には違ひないが、それ以前に今少しく考慮すべき何物かがありはしないかと私に憂慮する。

吾々の運動は、昇格ではなく、權威なき差別の撤廢である。無論、それが普遍的な要求に従つて生れた必然的差別であるならば、吾々は寧ろその差別に従ふことを喜ばなければならぬ。偉大なるものに服従し、禮讃することは、吾々の自然であり美を要求し力を頼む吾等の本性である。而し、それが弱きものゝ屈服を餘儀なくした不自然なる差別であるならば、吾等の之に従ふは押しひしがれたる壓迫の無抵抗を意味するものだ。

全ての不自然なる差別撤廢に當つて之等運動の動機が、好位置を占むる少數階級



に對する嫉妬から出發する場合が多い。之等の人々は自分自身その好位置を占むる時、むづかる子供にピケットを與えたる如く穩なしくなるものである。彼等は主義のために戦ふのではなく、主義を看板に自己の有利なる地位を得んとするモンヌターである。全体のために機會均等を叫ぶのではなく、自分一個のために機會均等を叫ぶ善良なる体裁をした間者でなくてはならぬ。吾等の仲間に對して如何にも忠實らしい斯ふした人々に社會はよく眩惑されるものである。

兎も角も吾々は、必要なる差別に於ける資格をのみ尊重し、それ以外の不必要なる資格は驅逐して、名目を尊重する前に先づ實質を尊重しなければならぬ。

學士の肩書を喜ぶ前に、學士の名目を單に大學を出た記念章にまで下落させて彼をも他の社會人と丈くらべをさせる必要がある。社會は彼等を他の人々と丈くらべをさせる前に先づ肩書を崇拜するがため、彼等は自己を豊富にすることを忘れ、連りに肩書を欲しがるのである。

世の中が腕つぶしの競争になるとき、始めて、眞に偉大なるものが出現する。亦そうならなければ、實力あるにも拘らず、格なきため却而資格ある無力者に屈服を餘儀なくされる世の中では全てが放漫で面白味もない。資格とは要するに實力を表明する看板でなくては嘘である。君は實力はあるが資格が無いからと云ふ言葉がいかに滑稽なものであるか、斯ふした言葉が平氣で通用する社會だから尙更滑稽である。そして、この滑稽な事實が、いかに眞劍なる人々を苦しめてゐることか、全ての資格なきものに與へられたる試験制度それは餘りに残酷なる難關と云はねばならない、制度そのものは獨學者の福音に違ひないが、その試験の内容に至つては餘りに獨學者の境遇を感ぜざる樂境である。順調なる進路に所謂資格を得た人々に比し遙か直譯も實力を存せながら、此の難關をかためて苦しんで功なく、精勵して實績なく、終つて難關なる意志を挫くに至る不遇の闘士は決して少なからざるものがある。或は多量の浮浪者







よる経済的施設等は後者の任務である。如何なるものを要求し、如何なるものを相續するか。私は私の希望を述べて同志と共に研究したいと思ふ。要求すること以前ある。前者が國家を救ふ苦學生の救済、後者が苦學生自身の救済である。

苦學生は社會苦難救済の社會的施設、苦學生自身の自衛の施設である。この二つの施設は並前にも述べたる如く、從來苦學生の適業として行はれた職業も次第に純職業者によつて浸害され、はやく苦學生が職業難に類した今日、之が救済は國家の大なる力に俟たなければ、個人の力によつては如何とも仕難き大勢にあるやうである。苦學生の性質と事情を尊重して、最も有意義なる方面に活用すべく適宜なる職業を與ふべきではなからうか、労働者過剰の時に當り、餘り適業ならざる之等社會に苦學生を投ずるよりも、今少しく有意義なる職業は必ず當局者の熱心により見出すことが出来るに違ひない。即ち、民間事業を妨害しない種類に於ける事業を國營によつて組織し全ての従業員を苦學生から採用すると云ふが如き方法は、必ずしも

不可能事ではないと信するものである。只、その事業の種類性質に至つては相當の熟考を要するに或る物論であるが、斯うした一面は單なる机上の空想めいた希望では無く、都下幾千の極める苦學生のため、將來に來るべき苦學生等のため、そして、更により多く無産階級者をして勉學の途を開くため是非共必要なる施設であらねばならぬ。之が施設は夜學制度の完備と共に現今窮迫の極にある苦學生を窮地より救ふべき二つの大いなる方策である。

二、苦學生の保護機關

苦學生無業救済の施設、職業訓練の施設、職業調査の施設、職業の指導、苦學生の土地不案内或ひは、經驗未熟等により苦學生が持つ弱點を補導するため、今少し完備せる保護機關は何ぞ云つても必要であらぬ。全ての誘惑乃至悪商人等の危計に陥れる苦學の失敗は多く之に對する保護不十分を物語るものではなからうか、苦學生の現狀調査は當局者としても充分注意すべき問題で、放任のまゝに關心するこ



となく、善後策を講じないことではなかつたことか、無論、當局にも厳密なる調査と  
成案はあることには思ふが、都下に泣く苦學生の日々に増し行くこと、苦學生を  
種に私利私腹を恣にする社會人の餘りに多きを知るとき、吾々は今少しく之が機關  
の充實を促したいものだ。

苦學生職業紹介所の活躍、相談所の完備、調査部の發展、取締の嚴重等、苦學生  
保護機關として眞に苦學生指導の使命を果すべく設備と活動を切望して己まない。

### 三、苦學生自身の覺醒

苦學が出来ないと云ふ愚痴を並べる前に、苦學生は先づ、なせ苦學が出来ないか  
の考究と、善後策に努力する必要があるはしないか、苦學難の窮狀に直面して、苦  
學生は自覺と自重を要する。彼自身目醒むべき時である。苦學生は協力團結して御  
互ひの位置を向上しなくてはならない。自治機關の組織、聯盟一致の歩調は是非共

必要である。或は、協力による經濟施設をなすとか、或は、互ひに意志の疏通を計  
つて苦學改善に力めるとか、親善協調のため機會を撰んで集會を企つるとか其他年  
一回、大會を開催して慰安日を設くる等、御互ひの幸福のため、來るべき同志善導  
のため各自が覺醒して、之等の美譽を促進すべきだと思ふ。或程少數團體の制裁は  
少なからず存するや否やはあるが、其の内容に至つては尙充分の考究を要するやう  
である。

吾々は、苦學生救済の第一着手として、先づ苦學生自身の覺醒を喚起するものだ

對策 田千之助

## 第四講 苦學黨の人類



### 第四編 苦學黨の人傑

#### 怪傑横田千之助氏

吾を時め、苦學法、横田千之助氏は、大養林堂翁、共、朝敵、苦學黨、生、救、きの、大先、輩、あり。政界の大親分としての横田先生は、確かに近代の快傑である、五尺を出で、その小軀は、之、智謀、膽略の結晶、主義を擁護しては、頑として動かざる、魂、空、鬼、神、も、三、舎、を、避、け、ぬ、概、が、動、物、也。今や、先生の風格を慕つて、集ひ來る、健兒、幾、百、也。大、族、藩、小、族、幾、千、を、離、して、政、界、に、驅、馳、す、能、處、日、將、江、泰、山、の、重、畧、が、ある。幸、願、の、す、み、來、る、も、同、志、善、信、の、先、生、取、巻、者、ま、で、功、の、人、で、ある。善、強、壯、人、で、ある。而、且、只、強、壯、人、に、は、ない、爆、助、を、頼、む、男、は、誰、か、常、に、豊、か、なる、涙、を、拭、く、る、快、氣、と、慈、愛、に、満、ち、る、慕、は、れ、き、人、格、は、

萬軍も敢て辭せざるの勇あると同時に、弱き者を見ては脆くも涙する、嚴と慈を兼ね具へたる英雄通弊の殘虐性に習はざる稀に見る俊傑である。吾々は、只強き我武者羅に服するものではない、強き眼光に尙豊かなるうるほひを持つ、慈愛に満ちた優しさにこそ眞に敬服するものである。殊に、先生の多忙なる生活の反面に朝の讀經があり、夕の風流あるを聞くに至つては、英雄なほ己を知つて神佛に歸命するの崇高なる態度と、寸刻の餘暇なきが如くにして、尙悠々閑日月を樂しむの綽々たる餘裕を識せざるを得ない。

此の宗教的信念と、精神的豊富なる餘裕あればこそ、主義の貫徹に當つては懸河の辯よく敵を言殺して一步も下らず、大事に望んでは尙百倍の勇を鼓して着々端を開くの間があるのである。

横田先生の本領は政界の風雲児としての自在なる活動にあるは勿論、佛前に於ける朝毎の禮拜、さては、一莖の花にも奔放なる藝術境を味はひ得るその豊かなる人



間性に更に他の追隨を許さざるものがある。先生を以て、進を知つて退くを知らざる荒武者の如く解し、或ひは小略權謀の徒と同一視するは、先生の本領を知らざる餘りに遠き輩である。

此の勇と、此の仁、之等は先生の天性だと云へば云へる、亦、恩人星享氏に感化する處少なからざるものがあると云へば云へる。而し、その一班は苦學奮闘の時代に於て養はれたものではなからうか。

剛毅果斷、主義の貫徹を期しては一步も譲らざるの勇は、その昔、生活苦と闘つて猶よく勉學の志を成し遂げたるの勇そのものであり、萬人を抱擁するの大量と、弱者に對する俠氣は、刻苦奮闘苦難と闘つて辛酸の境に味到したるものゝみよくするの本領でなければならぬ。

意志の人であると共に、熱の人であり、剛慢なる人であると同時に涙の人である近代の怪傑横田先生は青年時代に於て果して如何なる酸苦をなめたであらうか。

少年時代の夢は勇ましき將軍の金モール姿にある如く、先生も亦少年時代の希望は軍人になることであつた。殊に先生の剛毅果斷なる男性的氣性は、軍人として相應しい性格であり、適當なる睡僚だつたに違ひない。而し、惜しいかな先生身長五尺を出でず、之だけは如何とも仕難く遂に志を他に轉じて辯論を以て世に立つの決心をしたのであつた。

草深き朽木の僻村から笈を負ふて上京した一青年横田先生は、空手空拳先づ新聞配達の群に投じた。全ての誘惑を斥け、いかなる刻苦にも耐え、朝夕幾里の道を駆け歩く疲れを慰するの暇もなく、寸暇を惜しみて勉學の途にいそしみたる當時の酸苦は、今更冗筆を費すの用もあるまい。而し、未來に於て何事か成し得る人間は、どこかに衆人と異なる處がある。横田先生が、明治の怪傑星享氏と切つても切れない縁を結んだのは此の時であつた。

或日、星氏の玄關には二人の書生が訪れた、一人は色白の物優しい美男子である



に反して、今一人は美男子ならざる田舎臭い身体の小さい男であつた。星邸では二人の中からどちらかを撰んで書生に雇はふとするのだ、之が人撰にあつた星夫人は一見、白矢々美男子に放つてしまつた。

處が、どうしたことか折角雇つた男は來なかつたので、仕方なく星邸では採用試験に落第した美男子ならざる横田先生に使ひを寄せて是非共來てくれと依頼して來たのだつた。先生は、此の使ひを言下に斥けて、長文の手紙を書き、苟しくも人物は顔の美醜で決するものではない、自分は壮志を抱いて、斯る方針の下に之々の奮闘を敢てしてゐるものである。星夫人ともあらう者が人を撰ぶに美醜を以てする等は餘りに輕卒なる仕打ではあるまいかと、當時、飛ぶ鳥す勢力のあつた星氏を相手に、堂々所見を述べて人を見るの明なき者に從ふの要なしとて奮然斷つてしまつたのだつた。此の正義に燃ゆる熱、勇氣こそ、今日の横田先生ある所以であつて、善と信じては敵を撰ばざる處全く常人の追隨を許さざるものがある。

而し、英雄は英雄を知る、怪傑星享氏は此の一青年の激烈なる文に接してその有爲なるを識り再び禮を盡して當時の新聞配達夫たる一寒生を迎へたのである。善と信じては高位高官も眼中になき一寒生と、名もなき青年の惡罵に接して却つて偉材を知るの明ある俊傑と、嗚呼！其處に何の階級があらう。怪傑星享にして始めて此の明がある、怪傑横田千之助にして始めて此の勇がある。兩靈相結ぶ處將に悉相和すの微妙さがあるではないか！

琴星享氏、玄關番としての横田先生は全く眞劍なる學徒であつた、中央大學に通ひつゝ、辯護士試験の準備に餘念なく、亦、暇さへあれば物置の蔭で辯説の獨習をなす筈、時に先生壁に向つて無中に辯説を奮ふ時、後に人影あり、星享氏は「横田好くなつたのー」、軽く肩を叩いたと云ふ。専勵が成つて、大學の卒業と共に辯護士試験にも目出度バネしたる先生は、兼ねての志に従ひ辯護士を以て終始する決心でゐたが、先生が中途政界に打つて出たる



動機は、恩師の不時なる最後に對し、師の蒙りたる社會の誤解を一掃すべく知遇に感じての勇奮であると云ふ。怪傑星亨氏去つて、更に怪傑横田先生あり、良禽は良樹を撰ぶとか、英雄は英雄を知るとか、兩靈發して精を生む、將に情豊かなる處偉人の一生ではある。

### 大正の俠客 鈴木文治氏

『まあ、俺に頼せろ』と、二十貫餘の巨軀に太鼓腹を突き出して彼が自信ある一言を放つ時、全國に群る勞働者は如何に心強く感ずることか！吾も吾もと資本主義に隨喜する時、時代の風潮に逆行して世の資本家達を尻目に向け、悠々——而も敢然として弱き民衆のためにあつさり命を投げ出して主義に闘ふ熱血漢、今様幡隨院長兵衛たる彼、一寒の書生よく友愛會を組織して日本勞働團體の先驅をなしたる彼全國勞働者の渴仰の的となり、今や推載されて國際勞働會議に重き使命を帯びて日

本勞働者のため万丈の氣を吐くべく船出したる彼、彼とは誰ぞ？ 苦學生から叩き上げた鈴木文治君その人である。

明治十八年の秋未だ若き頃、仙臺を離る程遠からぬ片田舎に孤々の聲を揚げたる氏は幼年時代を楽しく過し、中學校を卒業する頃までは父母の慈愛に何不足なく暮すことが出来た、氏があの有名なる吉野作造博士と知り合つたのは丁度此の時である。當時、仙臺高等學校の一生徒だつた吉野作造博士は、氏の得難き良友として、氏を啓發すること多大なるものがあつたと云ふ。

十八の春、優秀なる成績を以て中學校を卒業したる氏は、勃々として起り來る華やかなる空想に夢のありだけを盡して順風に帆を揚げたる自己の幸運を讚美したることであらう！ 而し、順調に平凡に進むことは彼が今日の大をなす所以ではなかつた。俄然大破綻を來たしたる家運は幸運兒をして忽ち悲境のどん底に落し入れ、時き影は彼の身邊にまで襲つて來た。此の變り果てたる自己の境遇に幾度か泣き、



幾度か運命の悪戯を呪ひたる彼は終ひに小學校代用教員として隣村に通ひ僅かに家計を助くる身となつた、此の時實に彼の月給は十山を出でなかつたと云ふ。

而し、寒村に埋木となるには彼は餘りに偉材であつた。湧き來る大志抑へ難く終ひに彼は雄圖を抱いて僅かの旅金を懐中に慈愛に充つる兩親の膝下を後に雄々しき門出をしたのである。

山口高等學校——それは氏が苦學への第一歩であつた。あらゆる困苦缺乏は一日の安き日もなく氏の身邊を襲つたが、強固なる意志は却而目に養はれゆくの觀があつた。斯くて高等學校時代を苦闘に終つた氏は、二十一才にして上京し、東大法科の政治科に學んで先にも増したる悲惨なる生活と戦はねばならなかつた。三度の食事すら満足に出來なかつた當時の氏は、搦て、加へて父の病報に接し、懊惱の極終ひに自殺をさへ決心したものであるが、此の最後の苦悶から悲痛なる叫びとして氏を發奮させたるものは、「何くそ」の一言であつた。或は、夜學に教鞭をとり、或は

通信員となり、或は雜誌「新人」の編輯員となる等、一寸の餘裕もなく働いて僅かに學資を得るの途を講じ、遂に明治四十一年大學の目出度き卒業を迎へたのである。氏が今日、貧しき人々のために死を堵して職ふの擧、決して偶然ではない、過去に於ける自己の苦しき体験と苦衷は、直ちに貧民を救への叱呼となつて輕々と一身を捧げ、「俺に頼せる」の一言を放たしむるに至つたのである。氏の如き、誠に男子中の眞男子ではなからうか！

### 小ぢな學問

### 後正議 苦學生の手記



## 第五編 苦學生の手記

## 小さな祝宴

苦學同志會員 古 島 生 六

いやにどす黒い雲が空を流れる。町一帯は灯の海だ、薄汚ない二階の六疊には並べるだけ机と本とが並んで、その上にぶら下つた五人の汗臭い着物が飽くまで此の部屋を暗いものにしてゐる。

足を洗つて上つて來たHが、暗いな——と吐き出すやうに云ひ——電氣のスイッチを捻ると、投げ出したやうに腰を下した。Yはさつきから、全てを忘れたやうに屋根に腰掛けてハモニカを吹きすすさんでの

る其の中皆んなどや／＼と歸つて來た。此の部屋で四人までは新聞の配達夫であるたゞ、Kのみは夜中に起きて車を引かねばならないので、窓の下に汗一ばい滲ませ、うなされたやうに寝てゐる。「笑談云ふべからず」と、太文字に書いた貼紙と、壁と云ふ壁から、低い天井にまで落書した外國語の單語とが、此の部屋の特長である以外、部屋一ばいは人間と、机とで埋まつてゐる、くの字なりに坐つて、もうどこにも足を伸ばす餘地のない此の窮屈な室にも、一日の課業を終へて皆んなが顔を打揃ふ時、疲れた中にも相抱く靈は豊かに甦るのだ。

此の春、大學の試験を突破したHの顔は何と云つても晴々しいが、物凄い顔をしてゐるのは、借しくも破れて愛好の賣草を一本も吸はなくなつたKだ、すやくくと寝てゐる顔にさへ發奮の氣に満ちてゐる。

此の中で若いTとSは、間近に逼つた九月の學期をひかへて、歸ると直ぐページ



を繰り始めた。と同時にYのハモニカはびたりと止んで例のやうに机に向つた。

斯ふした人々には、夜涼みの人の氣配も耳には入らぬらしい、一時はページを繰る音とべんの軌る音以外に、此の部屋には咳一つ聞えない。而し、夏の夜がかまわず更けゆく時YもPも、Hも机にもたれたまゝ寝てゐる場合が多かつた。

夜中にKは起き上ると、誰の眼をも醒まさないやうにそつと出て行く……。電車の音が絶えて町全体が重くするしい夢を見る時彼は車の握棒をこつて本郷の大通めに出てゐた。空気が露に濕つて、さすがに暑い夏も夜更けの少時は世界を別物にし、ぬれた通動から通動への眼の到り限り、影は自分と車と、そして、動かない軒並の覺であるのみで、客の氣配は更にならない。

Kは車を社に御すと、客持の幾時間を蹴込から取出した受験準備書に目を瞋すのだつた。田舎を飛び出した許助の不案内は充分の準備も出来ず、春の試験にまんなは夏田舎を見たKはい此の九月こそはと云ふ決心と必勝を期する確信とが焼き付け

たやうに少もの間も彼の頭から離れなかつた。彼の力強い頑丈な身体は元氣で一ぱいしてゐた。

人は静かに夢を見る夜半の十二時頃から起き出で、三時四時頃までの斯ふした活動は收穫の多い日こそは酬みられるが、若しも客持の少ない時などは、間近に逼る試験期を控へての彼にどう、なほ明身の生計にまで煩はされると云ふことがごんに心苦しいものであつたか！ そして、收穫の多い日は徒らに活動欲をそゝつて自然彼の顔も希望に満ちた華やかなものであつたが、收穫のない日に限つて無暗に長い時間は、彼の限りなき空想と、逼る来る情緒に或る物悲しさをしみたりと覺えるのだつた。

而し、そんな時彼を勵ますものは故郷の年老いた母であつた。衰微にきつた我が家の現狀であつた。その度には、彼の勇奮は益々力強いものとなつて動かし難い意志が培はれてゆくのを感ずるのだつた。



薄暗い二階の六疊が今日は何となく華やかな気分になり充ちてゐる。秋風が立つて何となく引締つた気分が地上に漲る時、此の部屋には二つの角帽が掛けられてゐた。

今日は、Kが無事にM大學の編入試験にパスしたと云ふので、貧しい部屋にも心づくしの祝宴が張られてゐるのだ。春以來、むづかしい顔に笑ふことさへ知らなかつた彼の顔も見違へるやうに晴々しくて、大聲に笑ふ聲が窓を流れて大道にまで聞えて来る。

音楽好きなYは、今日は心ゆくまでハモニカを吹きすさむことであらう！ ドラ

聲のHは自分のことのやうに喜んで、嬉しそうに笑つた後涙さへ浮べてゐる。

黒く焦けて奮闘の跡を頬に列む之等の人々のそげ／＼しい顔に光る瞳には何とも云へぬ優しさが溢れて、机の上に並べられた——たこへそれは貧弱にしる数々の御馳走には友を思ふ心からの祝ひが一筋に希望の道を歩みゆく人々の美しくい心を遣

儼なく物語つてゐる。放たれた窓からは涼しい風が訪れて、更けゆく秋の夜の物やはらかな空気が、すべての怒うと、燥音を彼の寛大な手に抱擁し盡すやうである。

赤い酒がコップになみ／＼と注がれて、五人の若い苦學生が輝やかしい顔に之を捧げた時、陰気な六疊の部屋からは息づまるやうな萬歳の聲が叫ばれた。

苦學生のユートピアは幻滅する

苦學同志會員 新見 生 賢

水清き、流れに其の純な心を寫した者に取つての誘惑の魔の手は焰の如き勢を以て襲つて來るのだつた。その心は水面を神が見る時直ちに鬼面の如く寫つたに違ひないと思ふ。自分も又こゝうした誘惑の魔手を逃れ難く大碓崗を抱いて四年前の大正







三田の英語學校に毎日行けぬ爲め隔日に通つた頃の自分はこうした素派らしい意氣だつた。此分な馬才の時は専檢合格、遅くも廿一才の時は外語、否、肩書が必要だか、此高へを以て希大へしようして二十八になればきつと完全に學士様、そして高文才な私が在學中にバスして外交官として赴任して………。全く光明赫々たるものぞあつた。こうなれば百と〇〇などと空想を廻らすのも實にたまらぬものだつた。業務は八時から翌朝八時迄の二晝夜交代でたゞ慣れるまでは足が痛くて閉口した。高等小學を完全に終つた者には少しも困難のことはなかつた。大正十年九月には、中學の四年の編入試験にパスして入學することが出来た。……。……。

多田舎へ東京から歸る人が成功の桂冠を得て歸るのも無理はない、こんな正容場であるからと得々とした。而し、第一歩の魔の森には入つた、一晝夜、交代では到底満足な苦學をやつて行くことは出来ない、郵便局も休む、學校も休まねばならぬ、學校は殆んど一ヶ月二十日しか出席出来なかつた、でやむなく十二月試

験を前にして郵便局を退いた。

四

それから自分は新聞社の發送部には入つた。時は丁度十二月で寒さも相當厳しかつた、新米の自分は毎日三回は停車場迄に新聞を積んで走つた。社内では新聞を荷造りするのだった、午後三時から十時半まで日給二圓を貰つた、初めの中は繩を持つ手が赤くなつて豆が出た程だった、又雪の降る夜など自動車荷物の上に乗つてM驛まで行く時などは寒くてブル震へ通したことが二ヶ月も續いた。夜家に歸つても寒くて二時間位は寝られなかつた、眞に社内では新米の自分達は古い人々に、馬鹿！のろま！なぐるぞとか怒鳴られて、此の乱暴の言葉に又縮みあがつた、時折は實際撲り合もあつた、こうした霧國氣の中にあつても其頃の自分はまた他を顧みず比較的一生懸命に勉強を續けることが出来た。然し一方自分ばかりの間、苦學生の見ざるべきものを見た、悲惨な労働者の姿を見、資本家の



の横暴を知つてしまつた。それで遂に此の方面に覺醒を促がされた自分は十二年の三月に修業證書を得ずに退學してしまつたのだつた。

其後今日に至るまであちこちの豫備校を辿つて昨春日本大學の社會科に飛び込んで將に研究中である。

## 五

この間の職業は十二年の大震災火災までは新聞社で發送を勤め、又新聞社の見習記者生活をして居た。見習記者生活も自分が思つた様な面白いものではなかつた。多くの人が希望する様な眞のジャーナリストは見出せなく、殆んどが資本家の手に左右される者ばかりだつた。此處で書くことではないが、ほんとの社會全部のため新聞は出來ないのが當然である様に、我日本でもやつぱり新聞は資本家の手に握られて居て彼等のみに都合の良い事を報導する機關であることを知つた。

## 六

次ぎに自分の苦學して來た方法を述べ様。それは失敗者の自分として論ずべきではないが、其の中途に至るまでの丁度順風に帆を擧げて走る船の如く得意であつた時代の日課を諸君に知らしたい。日課は大體次の様である。

先づ全課目を二十四時間の中、當時新聞社發送部に三時より十時半まで勤務したから大體八時間と見ることが出来る。勿論通勤出來得る地点としてであつて、睡眠が七時間、食事、校の往復が一時間、計十六時間、後が勉強時間だ。學校は八時から三時まで一すると夜歸つてからと、出校前で一時間半位しかかない、この時間で補習から復習をせねばならぬ、到底満足なことが出來様筈はない。

其後中學をやめて英語を専門的にした時は學校で四時間英語を習ひ、帰宅後一時間半を補習、復習、他の三時間餘を一日三課目主義で學校へ行かぬ分を補ふことにした。自分は大體この様な方法でしたが、それは決して時間割を定めたからとて其様にはゆくものではない。而し、かう云ふ風にして大體或る一冊の本を幾日で讀了







ら嫌な時には學校へ出ません。好な時に勉強してこそ頭へも這入るのでしよう。

十月十六日 火晴暑からず寒からず。

兄より端書来るT君ヘレターを出す災害當時の實況を問へるに對する返信なり。ポイエツト・シェレーはこう云つた。「前を見ては後へを見ては物欲しとあこがる、かなわれ腹からの笑と云へど、苦しみのそこにあるべし。うつくしき極みの歌に悲しさの極の想こもるとぞ知れ」

十月十九日 金、奇麗なる秋日和

「豊に實のれる」の歌を高唱したくなる。秋も最中であるからりつと晴れた秋晴の日は天下の樂を一集めにした様である。空は天眼通の様に澄んでゐる、だが朝夕はさすがに冷氣を感じる、代官山から吹き下す秋風は我室の前に聳ゆる杉の木にもう秋も半ばは過ぎたるこの俺の肌の温度で明るだらうと訪へば、杉の木はそうだくとうなづく。吾占領した三疊へも同じ知らせをもたらす野分に答へつゝ窓から空を

眺めると中秋の月が我この澄める心を知らずやと云はぬばかりに清い顔をして下界を見下してゐる。

十月二十一日 日、晴

M君来る共に三田高女へ行く、用件形づかす次の日曜日に再び行く事となる一泊してM君かへる。

十月二十八日 日、曇

人は己の過を認むる事を恥ずかしがらず。過を知るは今日は昨日よりも賢明となるなり。(ホープ)

私共はごんなに見すばらしくても現實を尊重せねばならぬ。何故ならばごんなに立派な理想と雖も現實を外にして實現されるところはないから。(カアライル)

十一月十四日 水、晴

暮と云ふものは何故こうも人の心をあはたぐしくさすものだらうか。否、人自身



がさう感じて自然とあはたらしくなるのかも知れない。あの太陽が西にうすれゆく  
のを見るご何かしら淋しい氣になつて、何かしら早くしろ、早くしろと云つてゐる  
様な氣持になつてくる。此暮に向ふ人の心は様々であらう。或は一日の勞働を了へ  
て楽しく休息をせんとするものもあらう。或は此夜の來るを恐れをのゝいてゐるも  
のもあらう。亦あゝ一日も過ぎて行くかと若き日をかこつともあらう。人の心は様々  
である、町の辻に立つて道行く人の一人／＼の心の中を叩いて見れば？…。

十一月十九日 月、曇

ストーブを燃せり。本日も平凡なる日なり、獸人物語を讀了るさ程の作とも思は  
れず。今夜憲法の副島師休講經濟原論聞きて歸る。Mの歸るを見送る花袋著録を讀  
了る。

十一月二十八日 水、曇雨になりつゝ夜に入る

雨に降られつゝ歸る、學校は休む民法を清書す。人は誰よりも善くせんが爲にの



み人生を研究する。智識の道程に人道を進めた人々の人生研究はそれである。

トルズトイの人生論を読む。一寸面白い事が書いてある。「凡ての言葉は文字に依つて出来てゐる。而して文字は線から成り立つてゐる。線を描く事は思想を説明する事と同様である。それ故に線は思想だと云ふ事が出来るわけである。」

十二月七日 金、曇

今宵クラス會ありき。若人の胸を撞きて流れ出づる校歌は太く、高く、低く、かすかに、駿河臺の闇に消えて行く。あゝ、楽しきかな今宵の宴や見よ若人の胸に希望の光の輝くを赤き血潮のたぎるを見ずや明けの鐘打ち鳴らしつゝ國の榮を胸に抱て男々しく進む吾等が行手に幸あれや。

十二月三十一日 晴

除夜の鐘聞きつゝMと共に汽車に乗り南海指して直暮らに馳す。

一月一日 晴



世は新たまる。左の如きものを見る。

猶太の古人歌へり「空の空なるかな全ては全なり。日の下に人の勞して爲す處の諸々の働きは其身に何の益かあらん。世は去り、世は來り、地は永遠に保つなり。日は出で日は入り、亦其出づる所に喘ぎ行く」偉人と凡人智者と愚人、幸福なものごと不幸なものごと、生前の人間は千差萬別だが全ては死によつて平等に歸する。違ふものは其墓石の大小だけである。

世の空なるを思ふとき、吾々の存在は何の價値も無い事になる。しかし吾人が生きてゐる間は吾人の間に起る全ての事は恐畏であり、之に對抗せねばならぬ。

### 私は止らず

哲學同志會員 渡邊菊治

孤々の聲をあげた、私は人間と名のつく貴き使命の下に、そして今將にその半生をやらは過ぎ行かんと刻一刻の猶豫もなく死の彼方へ、坐す、起つ、歩む。この大宇宙よりズット行き詰りの極致へ、そして、それは永劫にこの惠多き陽の輝きのない暗黒の世界である。そこへ私は半生の鍵を今握らんとして起つてゐるのだつた。この頃、私は何う身をいやうと左右して生に愛着する事、襲はれた。蓋しこの何うしようは死——これに返られた。或瞬間の生の愛着心それであつた。斯く吾々人間と名の付くものは理性に富んでゐる限り色んな事に價値をつけて、そして色んな事を研究して見ると云ふ好奇心が湧く、そして理論、乃至倫理に通じて居る者は自然さか、人生さかつてお互にうまく撥を合せる事になれてゐるが、而し、さて自己そのもの、問題の主となつて、否、さうなつたとき先づ、人一倍煩悶の多い事であり、そしてそれが只一個人の問題でなく、一般社會の問題となつたとき、自分の今までの聲明が不信任となり、結局墮獄の罪人となるのである。斯く一に偏した墮獄



の罪人となつて始めて、その自己の何たるものが知り、そして社會の何たるものを識る事が出來のである。この意味に於て吾々は未得の寶を獲得すべく、日々、時々、刻々、刹那——その理想の幾分成就につとめなければならぬ。

この未得の寶とは所謂各々その抱負する最深要求であらねばならぬ。何うかして自分は眞の人生を味はうて見たい、何うかして自分は人間らしき人間となつて見度い、こんな事を何時でも繰り返し口の中、咳いた頃はもう過ぎた、だが口の中で咳く、そんな愚痴は莫迦らしくなつて來た。咳く、嘔く、小さな事に瘡癩玉が飛出す、氣にかける、面相が變る、开は小人の常である。さう自分に思ひて來た今、俺も餘程愚痴であつた。否、今もやはり愚痴であるのかも知れない。てふ事を言ふ丈け幾分、何事にでも黎明の如く哲學的に指摘して見る氣になつて來たが、未だ小人の群に這入つてゐるのだなと考へて、それでも落付かない。事に當つて水の如き態度、その修養に専心である今、何うしてもこんな小事を

考へる隙がない。所で俺は俺の最深要求である或る者にならうとつとめる、そこで俺も随分色んな事で煩悶した時もあった。そしてこの男が泣いた時もあった。悲觀の絶頂とも言ふべき死を求め氣になつた事もあつた。それが、今、ケロリと忘れ去られた様にすまし込んでゐるそのづう／＼しさ、とその氣魂の注溢は、以て俺の最深要求を満たすに充分であるかの様に思へる。而し俺は俺一個の事を吹聴するのではない、世間にありふれた斯うし、天狗連中の鼻を明かしてやらうと云ふ氣でもない。然らば何だ、只俺は俺の言ひ度い事を言ふ丈けに止まるのだと斯う考へてくれ給へ。まあ、笑談はさてじや……

私も半生を目の前に控へてゐる事とで、随分忙がしいやうな氣がする。それでも強ひて、水の如き態度を探る事につとめてゐる。で私は人らしい人になる事は出來得ない望みではあるかも知れない、そして、それは誰しも希望する人間最大要求であつて、永遠の努力、小我を捨てる事に依つて實現されるものである。小事を大事



にするのは小人である、又それをより大なる事に使用するのも小人である、だから小人は小人として扱はねばならぬ。如何に理解ある者にしても、この小人である中は、大事をなし遂げる事は出来ない、そして大事を恐れる、この場合、水の如き態度にて接したなら、必ずや成就は至難の事ではないのである。

水の如き態度——それは事の前後を見廻して後、悠々と、そして静かに、その事物を片付けてゆく、それが私の言ふ水の如き態度である。

世には一寸の事でも随分大きい事にして、さはぎたがる場合と、人物が渺なくない、こんな事を以てその人の不なれど、人物の何んなものであるかを初見の人にも見破られるものである。だから飽くまで、静かな、落付いて、悠々と片付けてゆくそれが私の水の如き態度である。一瞳、一言、一動にも注意せねば、すぐに相手を怒らすとか、又は嫌はれるとか、で感傷の激しい吾々、人間と名のつく感情の動物はなか／＼仕末が悪いのである。

故に一些事をも考慮しより能く推察する所に圓滑なる解決が與へられ、始めて自己の沈勇にして磊落なる新性質が涵養されるものである。これ有つてこそ純人間としての体面を辱かしめない、萬物の靈長たる資格ある所以ではなからうか。此の意味に於て私は、私の最深要求である「人らしい人」になる。人間らしい人間の臭を嗅ぎ、其味を味はふ事を強ひて欲する。即純人生の意義を現實に釋く事が出来る自分を以て、其目標をジツト睥つめ、而も沈勇果斷の態度を以て、一步は一步より現實を夢みて人らしい人への路を辿り行く憧憬の者である。

そこには何か、私を手まねきする高貴奕々たる力強い或るものが待ちひそんでゐるのではなからうか……。余や素より未來を談する程の見地あるものに非ずと雖も敢て記憶す、而して之を言ふ。豈大道の存在する處何をか恐る可き……。

道近しと雖も行かざれば到らず。君子は物を役し、小人は物に役せらる。  
燧石も打たざれば火光を發せず。努力は刹那を照し、要求を充たすに足る。



## 早稻田の宿舍より

苦學同志會員 鶴 家 寧 夫

早稻田鶴巻町××番地。二軒建の長屋の上四疊半一間。これが私達の城牒である。こゝで私とK君は起きたり食つたり讀んだり笑つたり泣いたり寝たりするのである。こゝから學校に行くには高田馬場驛まで出る。可なり時間もかゝるし、足も草臥れる。鶴巻町から高田馬場の間は電車がないのでこの間は歩かねばならぬ。

×××交番に突當つて左の通りを抜け出て鶴巻町の真中を通り早稻田大學を右に見氣も晴々する様な大學裏墓地の一部を通り抜けて上戸塚に出る。これで早稲田まで一寸三十分は掛る。それも天氣の善い春の朝或は秋の夕べには散歩がてら色々な事を考へながら歩くので心もゆつたりして非常に心良い場合もある。大學の側に來

ては角帽の大學生と自分とを考へ、又墓地にかゝつては累々と立ち列んだ墓の下に埋もれて永遠に沈黙を守る幾多のなき人々を想ひ、さてはやがて同じ運命に落ちるであらう自分自身とその周圍とを考へ、何んとも言ひ得ない寂しい氣持がする。それは確かに死の暗黒を眺める時、すべてに失望するからだ。そうかと思ふとK君と人生を語り、自然を語り、宗教、藝術其他色々なことに就いて語ると私は俄かにバツト光にでも打突かつた様な明るい氣持がする。全く明い心からの或る力を感じる。娑婆に於ける人間はやはり宗教と藝術とに依つて慰安を得るものだ等と思ふ。以上は天氣のよい日の私達のファイフの一部だ。併し冬の雪解の日、夏の雨降る日は全くこの私達をへど／＼に困らせて仕舞ふ。そんな時はなまじい物を考へるとか、人生宗教、自然といふ段ではない。オーバシユースも長靴も持たない私達は、人の様に平等で歩く譯にも行かないし、足をすつかり疲らせて、ぐにや／＼の體になつて宿舍に歸る。こんな時には流石のK君も困つたと見え。



「君、隣の近くに貸間を見つけようぢやないか、この道にはどうも困るね。」と心配する。

「見つかつたつて仕方がないぢやないか、貸さないのを無理に貸させる譯にも行かないし。」

私は一昨年の秋の事を思ひ出して斯ふ答へた。

x

その時はまだ私達は中學時代であつた。勿論苦學をして居つたので——今もだが——人の様に下宿とか、賭付きとかいふ譯に行かない。それで東大久保×××番地家主は大林と云つて、平屋で玄關のすぐ側の四畳半を月たつた八圓で貸して貰つて居た。そこでK君と私は自炊をしながら毎日學校と務め先に通つて居たのであつた。それは確か月の第二の土曜日だつたと思ふ。その朝私達は家主から部屋をあけて呉れるやうにと宣告を受けた。といふのは二ヶ月分の間代を拂はなかつたのが原因



である上に、その数日前、或る大學生が來ることに話が纏つてゐたのが主な理由であつた。私達はおまけに安く貸して貰つてゐた、ゆゑこの場合無理にすがりつく譯にも行かなかつた。で他に貸間が見付かり次第引越すことにするからといつて兎に角、その日は二人共學校には行つたが、その時の私達の心には不確實な生活計劃の不安から來る大きな心細さがあつた。その時の生活費といふものは務め先からもらふ二十五圓だけである。これを以て學校の月謝から生計の全部を東京の眞中で企てるといふのが抑々間違であるのに今、二ヶ月分の間代八圓と學校の月謝を拂へ残りは知れたものである。それで以て幾日の生活が立つか？ 犬でも猫でもない。人間と云ふ厄介な動物である。何んでもかんでも食べさへすれば、いゝといふ譯には行かず、翌月の給料日までは何んとかして生きなければ貰ふ分は廻つて來ない。私達のヤリ方も無謀には違ひないが、こんな破目に陥つた私達は氣が氣でなかつた。

——學校の授業は済んだ。私達は朝の事はちつとも氣にしない、その日に私達二



人の身の上にどんな運命がかゝつてゐるかを少しも思はない若い者は、何時までも無邪氣である。私達はいつもの通り宿所に歸へる途中、道の邊りに散らばつてゐる名も知らぬ草を摘みつゝ夢の様な未來を語りながら歩く、貸間の事等はどうかにかなるものと思つたのだらう。到頭宿所に歸つた。玄關を通る時、あのいやな家主が見えるかと思ふと、ピク／＼しながら私達の部屋の前まで来て障子を開けやうとした處がどうしたことか誰が部屋の中で障子を押すのかちつとも動かない。私達二人は異様な目を光らせて、互に見合せる許りだ、その時ばかりは泣くにも泣かれず、ふと私達の目は、障子の上に貼つてある斷り書を發見した。その貼紙には「本日より××氏來る事に約束相成候に付、他人の出入を嚴禁致候。君達の荷物一切は玄關前に出してあるから……」。二ヶ月分の間代は不要。大林」と書いてある。放逐といふものは、こんなものかと思つた。それでは、今、障子を引張つてゐるこの部屋は私達の部屋ではないかと考ふれば、くすりと涙が催ふし出した。私はK君に涙を見

せまいと思つて顔を其場からはづした。けれども私の心盡しも結局無駄であつた。といふのは最早K君も泣いてゐたからである。私達は唯、泣くばかりだ。私達は十分程は只茫然としてゐた。嗚呼！この十分の間、この十分は私達の一生を通じて忘れることの出来ない時間だ。私達は、この十分の間に子供が大人になつた。眞の鴈隨の奥から貴重な何物かが溶け出る様な涙を流して見た。

これから私達は何處に行くか。到頭、此の事を務め先の主人に打開けた。それで貸間が見つかるまで務め先に厄介になることになつた。で荷物は一旦務め先まで運んで、それから貸間探しに歩く筈だつたのである。

貸間探しの一行は、K君と、もう一人Yといふ務め先の知人が加はつて、三人連れであつた。進まない所を無理に方々歩いた。全く歩かされたといふ方が適切だ。大久保、新宿はいふに及ばず、市ヶ谷見附まで歩いた。貸間があるにはあつた、併し其等は皆賭付きであつて、自炊を許すといふものはなかつた。



それで幾日も／＼出直させられて四日目に市ヶ谷監獄の邊で貸間四疊半を見つけ  
た。貼紙には勿論「賭付でないものに貸す」とある。その時ばかりは前後も考へず  
見つけるものを見つけたといふ喜びに流石の私もポットした。

一行の中から、私が交渉委員に選定されたので、私は恭しく先方の門前に立つて  
案内を乞ふた。

「何か御用で……。」いやに目をしばたく禿の丈の低い爺が現はれた。

「あの……二階の四疊半を借りたいと思ひますが……。」

「そうですか、御使ひなさい。内では老人ばかりだから賭付は出来ませんから、そ  
の積りで……。何んでも、こゝは食堂がすぐ近くにありまますから非常に都合がよい  
ものですな。」

「あゝ左様で御座いますか、それは結構です。」

「間代は十二圓ですから。」

「えゝ間代は構ひませんが、あの……自炊を許す譯には行きませんでせうか。」  
事が譯なく進むので嬉しさの餘り私は段々話を滑らした。

「えゝ自炊は許すことが出来ません。」

「あアそうですか、それでは食堂に通ふことにして明日引越しませう。」と逃げなけ  
ればならない。

「そうですか、それで貴方は苦學生ですか。」

私は一寸まごついた。何んもなく厭な感がかみ上るのであつた。「遊學生」とい  
つて見ようか。否、一層正直に出る方がよい。

「はア苦學をして居ります」と、思ひ切つて言つて、さてその氣配を窺つた。

「はてな、そうですか。そいつは困つたね、あの何んです、苦學生の方なら貸間は  
困ります。どうも御氣の毒さまで」爺頭を右に左にかしげては頻りに困つた風をす  
る。



「困ることはないでせう。自炊をしなければよいぢやありませんか。」

「そう。貸せば譯ないがネ。その貸すといふのが問題でネ。いや先にも苦學生に貸してやつた経験があつたがネ、どうも汚いのでね。」

成程、苦學生には身體、着物等を清潔にする物質的餘裕がない。普通の人に比して幾分汚いかも知れない。併し苦學生といつたら一樣に汚い者と見なされるのが自分には、つらかつた。で、こんな爺と物を言はず、奮然立去らうかと思つたけれども、思ひ直して折れてかゝらなければならなかつた。

「それは、苦學生だつて十人十色ですからね、まあ、そんな心配はなさらないで、私を、嘘の爲に貸して見て下さい。」

「それは、どうも困りますね。と、幾度も同じこと許り繰り返す。私は色々自分の困つて居ることを話したけれども、餘り感動しないらしかつた。ばかりでなく出来るならその場を逃げ込みたかつたらしい。」

「内には借が居りますので、萬事あれと相談しなければや、私獨りで確答は出来兼ねます。なんなら、あれが歸り次第、貴方の所まで上らせませう。まあ、それまで一旦お歸りなされたがよいでせう。」

これ以上、仕方のないと見た私は、「否」と言ふ譯に行かない。

「どうですか、それではどうしませう。なるべく御相談なさつて宜敷く。」と出来ると、いつて、住所を書いて置いて、務め先へ歸つた。

私は微ながら、幾分の望を以て、その伴といふ人の來向のを待つて居た。幾等待つても遂に來なかつた。來る筈がないと見て取つて、私は我慢が出来なくなり、再びその伴へ行つて見た。その日は、どうに來たらしいが、その爺は漸くその時に私を大に紹介した。その伴といふ若い人は多少の愛嬌はあつたけれども、爺に負はない程の頑固な所があつて、迎も私の望を入れて呉れそまてなかつた。伴も弱り切つたか、何時の間にか逃げてしまひ。今度は達磨の様な御婆さんが出て來た。







## 生活断片

一一八

自由労働者の群に入つて二日目、日蔭には残雪が凍つて帯のやうに横たはつてゐる脊中を赤く染め出した粹な印禰天を初めて着たうれしさに昨日よりは早く家を飛び出して四谷の職業紹介所へと歩を急がせた。空つ風が身にしみてぞつとする。時々曲り角などで陳列の窓硝子に映る自分の姿を眺めて何となくうき／＼する微笑を禁じ得なかつた。昨日の事を思ひ出してゐるのだ。以前から一度は苦學生としての労働体験をやつて見ようと思つてゐた自分はずつと以前から一度は苦學生としての労働体験をやつて見ようと思つてゐた自分だ。冬季休業を機会に事務員の宗旨を代へて昨日始めて労働者の仲間入をしたのだ。労働生活の一日は寧ろ失敗に終つた。野暮な學生服のまゝの自分が、彼等入夫連の嘲笑の的になつたと云ふ以上に素人味たつぷりの一労働者に對する勞銀が働き振りの

如何に係はらず値下断行の憂目に遇つたことである。殊に素人臭いと云ふことが階級にける従屬觀念に導びかれて自分自身彼等の奴隷のやうな氣分を味はせられた。其晩—自分は古着屋の店頭立つてゐた、古着屋の爺さんはよく物のわかつた人で印禰天を求めに來たと云へば、店頭にはロクなものもなかつたので、わざ／＼彼の着用である赤字染の因縁話のあるS組の印禰天を安く譲つてくれた。無論、爺さんは私が苦學生であること云ふことをよく承知してゐたのである。

自分は職業紹介所へと急ぎながらも「此の印の入つた禰天は何處へ行つても巾が利くんですよ」と云つた昨日の古着屋の爺さんの言葉を思ひ出して或る優越を感じては淡いうれしさを覺えるのだった。

紹介所へは未だ二人しか來てゐなかつた、負請入夫の申込に應じて高田の親方の所へ着いた頃は、夜も白々と明けて其處には荒くれた常人夫連が焚火をしてゐるのだった。私は「お早よう」と云ふなり足を投げ出して火に手をかざした。



或る夜の苦學生 (戯曲)

苦學同志會員 H K 生

時 日 曇つた冬の夜

場 面 薄汚い三疊間の二階

正面に小さい窓其下に古びた机。

机の上に、小さいランプ一個、ノート、鉛筆、書籍(書籍の上に佐藤に宛て

たる妹よりの手紙がある)等が乱雑に置かれてゐる。

右の隅にすくけた柳樹一個其上にもノート、書籍が可成高く積まれ右側の壁

に徹底的眞の男子たれと筆太く書かれた紙片が貼られてゐる。

窓の反對の右隅が入口で直ぐ階段に續く、入口とは反對の向きで處々から綿

入 物の 食出てゐる夜具が敷かれ其上に外套やら着物を蓋してゐる。  
苦學生若杉、同佐藤(病人床の中に寝てゐる)

舞臺薄暗し、遠く微かに省線電車のきしる音(終りまで時々さすこと)あわた

ゞしい夕刊賣りのリンの音につれ幕開く。

時々病人の太い溜息聞ゆのみ。

暫くしてくすんだ窓の障子を眺め、病人人待ち顔に部屋の方々を見やりなが

ら深き思ひに沈む。

(舞臺前より稍暗くなる)

思ひ出したやうに、床の上にいざり机の上のランプを引寄せんとして力抜

け倒る。

「あゝ駄目だ」



無言。時々溜息聞ゆ、沈静

稍して病人の顔に嬉しい表情見ゆ

階段を登る音して若杉新聞社の印伴纏姿で登場

早速病人の枕邊に座り親味のある聲にて

「佐藤」

若杉の顔をなつかしく眺めて

「お——歸つたか」

病人「今日は気分はどうだ少しはいいか」

「……」

若杉病人の額に手を當て不安な表情音(熱もよす相も……)

「又熱が出たやうだな」(中……)

「……」

沈黙續く (この古舞台いよ／＼暗くなる)

若杉あたりの暗くなつたことに初めて氣付いたやうに立ち上つて机の上のランプに火を點す、この時本の上にある手紙を見て手に取り上げなつかしくほく笑む

すぐ元の場所へ座る。

「おい、佐藤妹から手紙が來るぞ」

佐藤口元に笑みを浮べながら

「そうか、さつき下の婆さんが何やら置いていたやうに思ふたが」

「俺が開封してもいいか」

「お——早く読んで聞かせてくれ」

「よし、ところで照ちやん(佐藤の妹の名)は幾才かの

「十四だよ」



開封しながら

『うん』よく字を書くの』

この時まで佐藤仰向に寝てゐたがそろ／＼俯伏に起き直る

若杉讀み始める

懐しい兄上様其後は長らく御無沙汰して御申譯もございません、さて今年は寒中殊の外凌ぎよく喜んで居ましたが兩三日こちら俄かのさむさむに身にしたえます。のみならず性悪しき風邪大分流行してゐる由兄上様や若杉様には別段御障りなく涉らせられてゐますか伺ひ申上ます。此許皆々變りなく暮して居ますから御安心下さい。

この頃は麥の中(二月頃の麥畑の耕作のこと)をしてゐますので朝は早くからお父さんお母さんと共に日の暮れるまで働いてゐます。朝なんか霜がたくさん下りてゐて鎌持つ手や足がごと／＼本當に冷たうございますがこちらより寒

いと寒ね／＼聞いてゐる東京で苦學せられてゐる兄さん等のこと思ふとすぐ何ともなくなつて毎日／＼そんな寒い日にも田へ出て行きます。ちよつと／＼で息づく

若杉の顔には奮の色現る

佐藤遠く故郷の空を想ふ體にて次第に首うなだれ思ひに沈む

父さん母さんは寒い田の中で夕餉の時に吃度兄さんのことを話合つては色々と案せられ、父さんなんか兄さんが御立ちになられて以來毎朝氏神様へ參詣せられてゐます

兄さん早く御成功して下さい、私さんなには嬉しいのでせう。いや私より年老いた父さん母さんはごんなに喜ばれることせう。それにしても今夜村の人々が来て表の間で色々兄さん等實の話をせられてゐましたがあのいやな川上の地主の甚五郎さんが、二人等



東京で苦學』してゐるつて言ふが、なにに苦學なんか出来るもんか、其中青い顔して歸つて來よるわ』つて毒々しそうに言つてゐるのをきゝ私其場で居るのが悲しく奥の間へ駆け込みました  
私が若し男子だつたら言ひ返してやるのに、女だからそれも出来ず本當に  
く口惜しうございました

讀み聲次第に低くなり若杉口惜しそうに舌打ちす

『あの甚五郎の奴——前にも變らすそんなこと言つていやがるんだな』

『……………』

佐藤溜息をつき夜具の上に俯伏す

若杉せゝら笑つて後すぐ讀み續ける

前よりも高き聲にて

兄さんも若杉様も早く成功なすつて下さいそして甚五郎さんを見返して下さい

い其日の來るのが私何より楽しみですの、お氣に障ることばかり申しまして、お赦して下さい、餘り口惜しかつた  
ものですからつい……………

それから今晚兄さんの着物が出來上りますから明日は早く町の郵便局へ持つせてまいりませう。下手ですがこれでも私一生懸命に縫つた積りです笑はない  
下さい……………

では今日はこれにてお別れいたします。寒い折ですから随分おからだ大切に  
若杉様に呉々もよろしく

かしこ

照より

兄上様まいる

讀み終るにつれ佐藤愈々氣力抜けおえつ時々なす  
若杉紙を巻き返しながら誰に言ふともなく



「照ちゃんは何日もながら優しいな。」  
手紙の封筒に収め初めて佐藤の様子に氣付驚く

「おい、佐藤どうした」

「……………」

彼の肩に軽く手を當て

「氣分が悪いのか——おい」

「……………」

若杉蒲團を彼の肩まで掛けやうとする。若杉漸く涙ぐんだ顔をあげ若杉のその手を握る。二人の視線合つて淋しい氣分  
みなざる。

あえぎながら低い聲にて「……」

「若杉——俺はもう駄目だ、甚五郎の奴に嘲けられるのも無理はない俺のこ

の頃のみすばらしい姿を見らう」

若杉無言のまま、遠い處を見るやうな体

「女々しいやうだが俺はもうこのまゝ死んだ方がいゝ、お前にはかり苦勞を  
かけて濟まん來月の試験にやア駄目だ」

言ひ終つて若杉の手を離しバツタリ床の上に伏す

若杉強いて笑ひながら

「おい、佐藤。お前はよつほど氣が弱くなつたのう。そればかりの病氣で何  
んだ、今更ら俺に苦勞かけて濟まんなんて、よく考へて見らう。國を立つ前  
の日俺とお前が日本晴の男山の頂上で何と言つて誓つた」

「……………」

「よもや忘れはすまいの」

「……………」



やゝ興奮した氣味にて

『互に手を握り交しながら如何なる障害があらうとも成功せずばこの男山の土は再度踏まない死して而て止むのみだ。しかし犬死はしないと誓つたの』  
「……………」

『そればかりじゃない』

後の壁の徹底的眞の男子たれと書かれた紙片を指差しながら、若杉いよゝ興奮し

『この演題の紙片を何と思ふ』

佐藤それを眺めて又俯伏す

『近郷六個村合併青年大會の其折お前が俺等の村の青年の爲めに氣焰を吐いたそれだ——其時の事を思ふのさ、俺は全く愉快だ』

佐藤其時の事を追想するが如く額を上げ共に演段に立つたやうな身振りになる

『お前のその時の聲が聞こえる、酔されてゐる満場の聴衆が目に見える』  
漸次二人沈みゆく

暫く沈黙の後、若杉口の内でく如くかすかな聲にて

『それに……………それに』

佐藤又うなだる

若杉涙ぐみ訴るやうな聲にて

『佐藤、お前は犬死してもいゝのか、俺を見捨てる積りか』  
「……………」

前の手紙を取り上げながら

『それにこの照ちやんの優しい手紙（早く成功して甚五郎を見返して下さいその時が何より楽しい）この言葉が解らんか、年老ひた父母の心が解らんか佐藤のしやくる聲す



「御兩親様はお前に犬死せよと毎日氏神様へ参詣はしてゐないぞ」

「……………」

「今お前がこゝで犬死して見ろ、御兩親様や照ちやんが何と言つて歎かれる

甚五郎の奴が何と言ふ」

若杉まだ何か言はんとして口籠る

ひとしきり二人のおえつの聲のみす

若杉あらたまつた調子で

「おい、佐藤、こゝまで漕ぎつけて今更そんな弱音を吐かないでくれ——出

郷した時のやうな強い佐藤になつてくれ、頼む」

佐藤聲をあげて泣き伏す

若杉彼の姿にうるんだ視線をそそぐ

暫くして佐藤若杉の膝に手をやり涙聲ながら稍強く

「若杉、許してくれ、俺が悪かつた」

「……………」

「俺も男子だ犬死はしないぞ、死んでも成功して見せる」

若杉うれしそうに

「お——俺の言葉が解つたか、俺等二人の仲にゆるすも許さないもない。そ

れでこそ天下の佐藤だ、俺はこんな嬉しいことはない」

佐藤床の上に起き立たうとつとめながら、力ある聲にて

「若杉よく言つてくれた、な——にこれしきの病に」

立ち上らうとしてフラ／＼とし床の上に倒る。若杉それを両手で支へ、優しく

「お——男子だ、しかしまだ熱が少しあるやうだ、無理しちやいかん何より

早く病氣を治すことだ」

佐藤心よく笑ひながら



「なーにこんな病氣に敗けてたまるものか、これ見ろう」  
起き上ろうとするを若杉とどめて

「まだいかん、今日は寝ておれ」

若杉彼に枕をさせ蒲團を着せてやる

平常の言葉に直り

「おい佐藤今日は少し収入が意外に多かつたから牛肉を買つて来た、それか  
らた前の好きな羊羹を買つて来たぞ」

佐藤感謝に満ちた聲にて

「有り難ふ」

「有り難ふもくそもない今から俺は下で煮て来やう、今夜は愉快に笑つて食  
ほふ」

「済まんの」

「なーに」

若杉階段を下りかけて一度振り返り佐藤の顔を見る

若杉退場

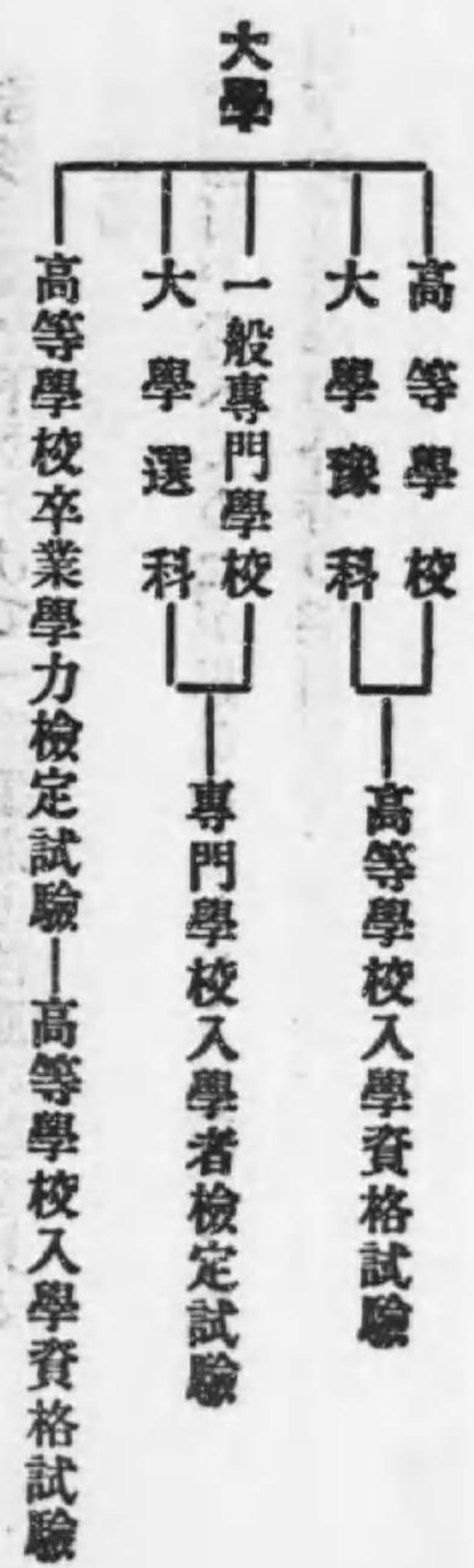
佐藤何か考へてゐたが思ひ出したやうに聲高く笑ふ

階下から若杉の吟詩の聲聞ゆ中に幕閉す。



### 「附録」 獨學者の進路

#### 一、大學を目指して



中等諸學校を経ない獨學者が大學を目指すには右の如き順序に従はねばならぬ、  
 それで、第一の難關は高等學校入學資格試験(高檢)をパスするか、若しくは専門學

校入學者檢定試験(專檢)をパスするかの問題である。

#### 専門學校入學者檢定試験

目的——中學校を卒業しない者で、各種高等専門學校に入學しようとするには専門學校入學檢定試験(俗に「專檢」といふ)を受け、其に合格すれば入學の資格が出来る。此の檢定規程を左に挙げる。(女學校云々とあるは、女子の專檢なり)

#### 専門學校入學者檢定規定

(明治三十六年三月文部省令第十四號)

第一條 専門學校ノ本科ニ入學セントスル者ニシテ中學校若ハ修業年限四箇年以上ノ高等女學校ヲ卒業セサル者ハ此ノ規程ニ依リ檢定ヲ受クヘキモノトス  
 第二條 檢定ヲ受ケントスル者ハ左ノ資格ヲ具備スルコトヲ要ス



- 一 年齢男子ハ滿十七年以上女子ハ十六年以上ナルコト
- 二 身體健全ナルコト
- 三 品行方正ナルコト
- 四 現ニ中學校若ハ高等女學校ニ在學セサルコト
- 第三條 檢定ヲ分テ試験檢定無試験檢定ノ二トシ試験檢定ハ官立公立ノ中學校若ハ修業年限四箇年以上ノ高等女學校ニ於テ便宜之ヲ行ヒ無試験檢定ハ當該專門學校ニ於テ生徒入學ノ際之ヲ行フ
- 第四條 試験檢定ノ科目及其ノ程度ハ中學校若ハ修業年限四箇年ノ高等女學校ノ各學科目及其ノ卒業ノ程度トス但シ中學校若ハ高等女學校ニ於テ加除シ又ハ課セサルコトヲ得ル學科目ハ之ヲ省ク
- 第五條 官立公立ノ中學校若ハ高等女學校ニ於テハ試験檢定ニ合格シタル者ニハ試験檢定合格證書ヲ交付スヘシ

- 第六條 官立公立ノ中學校若ハ高等女學校ニ於テハ試験檢定ノ問題答案及成績表ハ五箇年以上保存スヘシ
- 第七條 官立公立ノ中學校若ハ高等女學校ハ試験檢定手数料ヲ徴收スルコトヲ得
- 第八條 左ニ掲クル者ハ無試験檢定ヲ受クルコトヲ得
  - 一 文部大臣ニ於テ專門學校入學ニ關シ中學校若ハ修業年限四箇年ノ高等女學校ノ卒業者ト同等以上ノ學力ヲ有スルモノト指定シタルモノ

附 則

本令ハ明治三十六年四月一日ヨリ施行ス

試験科目——此の試験科目は中學の必預科目全體で、英語（英文和譯、和文英譯、書取、習字、會話若しくは讀方、文法）數學（算術、代數平面幾何立體幾何、三角法）國語（解釋、文法、作文、習字）漢文、博物（植物、動物、礦物、生理衛生、博物通論）物理



化學、歴史（本邦、西洋、東洋）地理（本邦、外國、地學通論）修身、圖畫（用器畫、自在畫）體操である。

高等學校 大學豫科 入學資格試験

目的——中學四年修了者等以外の者で高等學校に入學資格の無い者は、「高等學校入學資格試験」を受けて合格すれば其の資格が得られる。單に高等學校のみならず新大學令に據る公私立の大學にして中學四年修了を入學程度とせる大學豫科には凡て入學資格がある。此の試験規程は左の通りである。

高等學校高等科入學資格試験規定

（文部省令第九號大正八年三月二十九日）

第一條 高等學校規程第四十三條ノ高等學校高等科入學資格試験ヲ受ケントスル者

ハ年齡滿十六年以上ノ男子ニシテ身體健全品行方正且現ニ中學校ニ在學セサル者タルヘシ

第二條 高等學校高等科入學資格試験ハ文部大臣ノ指定シタル中學校ニ於テ便宜之ヲ行フ

第三條 試験ハ中學校第四學年マデノ必須各學科目ニ就キ第四學年修了ノ程度ニ依リ之ヲ行フヘシ

第四條 中學校ニ於テハ高等學校高等科入學資格試験ニ合格シタル者ニ合格證書ヲ交付スヘシ

第五條 高等學校高等科入學資格試験ノ問題答案及成績表ハ五年以上保存スヘシ

第六條 中學校ニ於テハ本令ノ試験ニ付試験手数料ヲ徴收スルコトヲ得

附 則



本令ハ大正八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

試験科目——試験科目は英語(英文和譯、和文英譯、書取、習字、會話若しくは讀方、文法) 數學(算術、代數、平面幾何) 國語(解釋、文法、作文、習字) 漢文、博物(植物、動物、礦物、生理及衛生、博物通論) 物理(物性、力學、熱) 化學(非金屬元素溶液論) 歴史(本邦、東洋、西洋) 地理(本邦、外國) 修身、圖画(用器畫、自在畫) 體操である。

試験施行學校と期日——試験期及試験施行學校は「専門學校入學者檢定試験」と同じで、大抵は兩試験を同時に行ふから、兩方の試験を受ける事も出来る。

「專檢」と「高檢」を施行する學校

東京府立中學校  
東京府立高等女學校  
埼玉縣立浦和中學校

埼玉縣立浦和高等女學校  
埼玉縣立熊谷中學校  
千葉縣立千葉中學校

千葉縣立千葉高等女學校  
栃木縣立宇都宮中學校  
長野縣立野澤中學校  
長野縣立上田中學校  
長野縣立諏訪中學校  
長野縣立飯田中學校  
長野縣立大町中學校  
群馬縣立前橋中學校  
群馬縣立高崎高等女學校  
秋田縣立秋田中學校  
秋田縣立秋田高等女學校  
新潟縣立新潟中學校

新潟縣立秋田中學校  
新潟縣立長岡中學校  
新潟縣立佐渡中學校(高檢)  
新潟縣立新潟高等女學校  
新潟縣立秋田高等女學校  
石川縣立第一高等女學校  
石川縣立金澤第一中學校  
愛知縣立第一中學校  
愛知縣立高等女學校  
和歌山縣立和歌山中學校



兵庫縣立神戸第一中學校  
 兵庫縣立神戸高等女學校  
 愛媛縣立松山中學校  
 愛媛縣立松山高等女學校  
 德島縣立德島中學校  
 德島縣立德島高等女學校  
 岡山縣立第一岡山中學校  
 山口縣立山口中學校  
 山口縣立山口高等女學校  
 三重縣立津中學校  
 三重縣立高等女學校  
 鳥取縣立米子中學校

鳥取縣立高等女學校  
 島根縣立第一中學校  
 島根縣立第二中學校  
 島根縣立第三中學校  
 島根縣立高等女學校  
 宮崎縣立宮崎中學校  
 宮崎縣立第二中學校  
 宮崎縣立高等女學校  
 熊本縣立熊本中學校  
 熊本縣立熊本高等女學校  
 大分縣立大分中學校  
 大分縣立高等女學校

鹿兒島縣立第一鹿兒島中學校  
 鹿兒島縣立高等女學校  
 鹿兒島縣立第二中學校  
 福岡縣立中學修猷館  
 長崎縣立中學校  
 長崎縣立高等女學校  
 佐賀縣立佐賀中學校  
 佐賀縣立佐賀高等女學校  
 福岡縣立 島中學校  
 福岡縣立福岡高等女學校  
 山形縣立新庄中學校  
 山形縣立山形高等女學校

岩手縣立盛岡中學校  
 岩手縣立盛岡高等女學校  
 福井縣立福井中學校  
 福井縣立福井高等女學校  
 青森縣立青森中學校  
 青森縣立弘前中學校  
 青森縣立八戸中學校  
 青森縣立高等女學校  
 神奈川縣立第一橫濱中學校  
 大阪府立北野中學校  
 大阪府立梅田高等女學校  
 滋賀縣立中學校



滋賀縣立高等女學校

廣島縣立廣島中學校

北海道廳立札幌第一中學校

北海道廳立札幌第二中學校

二、高等文官を目指して

高等文官——高等試験  
行政科 本試験——同豫備試験——高等試験資格認定試験  
外交科 司法科

高等試験

高等文官任用資格——行政官、外交官、司法官として策達するためには高文の任用資格を得ることが必要である。此の高等試験は行政科、外交科、司法科の三科に分

れてゐる。  
高等試験の科目は、行政科は行政学、外交科は外交学、司法科は法律学、文部大臣の指定する書類を以て用いる。試験の期日及場所は、文部大臣の指定する所である。

高等試験令

(大正七年一月勅令第七號)

第一條 奏任文官の任用資格試験、外交官及領事官の任用資格試験並裁判所構成法

第五十八條の試験は高等試験と稱し本令に依り之を行ふ但し特別の規定あるものは此の限に在らず

第二條 高等試験は毎年一回東京に於て之を行ふ其の期日及場所は豫め官報を以て之を公告す

第三條 左の各號の一に該當する者は高等試験を受くることを得ず



一 禁錮以上の刑に處せられたる者

二 破産若しくは家資分散の宣告を受け復権せざる者又は身代限の處分を受け債務の辨償を終へざる者

第四條 高等試験を分ちて豫備試験及本試験とす豫備試験に合格したる者に非ざれば本試験を受くることを得ず

第五條 豫備試験は受験者本試験を受くるに相當なる學識を有する者と認むべきや否を考試するを以て目的とす

第六條 豫備試験は論文及外國語に就き之を行ふ  
外國語試験は英語、佛語及獨語の中に就き受験者をして豫め一種を選択せしめ之を行ふ但し受験者の願に依り他の外國語を以て之に代ふることあるべし

第七條 豫備試験を受けんとする者は中學を卒業したる者、文部大臣に於て普通教育に關し之と同等以上の學歷を有すと定めたる者及高等試験委員に於て普通教

育に關し中學校と同等以上と認むる外國の學校を卒業したる者を除くの外文部大臣の定むる所に依り國語、漢文、歴史、地理、數學、物理及化學の七科目に就き中學校卒業の程度に於て行ふ試験に合格したる者なることを要す

第八條 高等學校大學豫科又は文部大臣に於て之と同等以上と認むる學校を卒業したる者は豫備試験を免す

豫備試験に合格したる者は爾後豫備試験を免す  
第九條 本試験は受験者學理上の原則及現行法令に通曉し且之を實務に應用するの能力あるや否やを考試するを以て目的とす

第十條 本試験を分ちて行政科、外交科及司法科の三科とす  
受験者は二科以上の試験を併せ受くることを得

第十一條 本試験は筆記及口述とす筆記試験に合格したる者に非ざれば口述試験を受くることを得ず



第十二條 民法、商法、刑法、民法訴訟法其他高等試験委員に於て必要と認むる科目の筆記試験及口述試験は受験者に法文を示して之を行ふ其の口述試験は  
第十三條 行政科の上は左の科目に就き之を行ふ

一、憲法 二、行政法 三、民法 四、刑法

五、國際公法 六、經濟學

以上の科目は必預とす

一、商法 二、民事訴訟法 三、刑事訴訟法

四、財政學

以上の科目は受験者にして豫め其の一を選択せしむ

第十四條 外交科試験は左の科目に就き之を行ふ

一、憲法 二、國際公法 三、國際私法

四、經濟學 五、外交史 六、外國語

以上の科目は必須とす  
外國語は英語、佛語及獨語の中に就き受験者をして豫め一種を選択せしむ  
受験者の願に依り其の選擇したる外國語の外他の外國語を併せ試験することあるべし

一、行政法 二、民法 三、商法

四、刑法 五、財政法 六、商業學

七、商業史

以上の科目は受験者をして豫め其の一を選択せしむ

第十五條 司法科試験は左の科目に就き之を行ふ

一、憲法 二、民法 三、商法

四、刑法 五、民事訴訟法 六、刑事訴訟法

七、國際私法



以上の科目は必預とす

- 一、行政 法
- 二、國際公法
- 三、經濟學

以上の科目は受験者をして豫め其の一を選択せしむ

第十六條 一の科の筆記試験に合格したるものは翌年に限り其の科の筆記試験を免す以上の科目は受験者をして豫め其の一を選択せしむ

第十七條 一の科の本試験に合格したるものにして他の科の本試験を受けむとするものに付ては必須科目の試験に在りては受験せざりし科目に就きてのみ之を行ひ選擇科目の試験に在りては其の科目中に受験したる科目なきときに於てのみ之を行ふ

第十八條 試験の合格者を定むる方法は高等試験委員の議定する所に依る

第十九條 高等試験の合格者には合格證書を付與す

第二十條 不正の方法に依り試験を受けむとしたる者又は試験に關する規程に違反

したるものは其の試験を受くることを得ず試験合格決定後發覺したるときはその合格を無放とす

第二十一條 高等試験を受けむとするものは手数料として本試験の一科に付十圓を納むべし

第二十二條 高等試験に關する規則は閣令を以て之を定む

附 則

本令は大正七年三月一日より之を施行す文官試験規程並外交官及領事官試験規則は之を廢止す

大正三年法律第三十九號中第五十七條乃至第五十九條第六十二條及第六十五條の改正規定大正三年法律第四十號并本令中司法科試験に關する規定は大正十二年三月一日より之を施行す



五 第五十五号高等試験令施行細則中「其科の試験を受ける者は受験願書に  
大正三年七月二十日閣令第二十号附則第二十号」を「大正七年二月閣令第七号」に改  
す。

第一條 高等試験を受けけむとするものは受験願書に履歴書及高等試験令第七條又  
は第八條の規定に該當するものなることを證する書類を添へ高等試験委員長に提  
出すべし。

受験の出願は豫備試験を受くるものに在りては毎年六月一日より同月二十五日ま  
でに、其の他のものに在りては毎年七月一日より同月二十五日までに之を爲すべ  
し。

第二條 受験願書には本試験の科分及選擇科目を記載すべし。

第三條 豫備試験又は外交科試験を受くる者に在りては受験願書に其の試験せむと  
する外國語の種類を記載すべし。

第四條 高等試験令第十六條の規定に依り筆記試験の免除を受くる者は受験願書に  
前年筆記試験に合格したる旨を記載すべし。

一の科の本試験に合格したるものにして他の科の本試験を受けけむとするものは受  
験願書に其の旨を記載すべし。

第五條 受験手数料は収入印紙を用ひ受験願書に貼付すべし。

受験手数料は試験を受けざることをあるも之を還付せず。

第六條 受験願書及添附書類は之を還付せず但し證書又は證明書は請求に因り之  
を還付す。

第七條 受験者試験當日開試の時間までに出席せず又は試験半途にて休止したると  
きは其の試験を受くることを得ず。

第八條 受験者は試験委員長の告示其他試験委員の指圖を遵守すべし。

第九條 高等試験の合格者の氏名は官報を以而之を公告す。



第九條 高等試験に關し本令に定むるもの外必要なる事項は高等試験委員長之を定む

本令は大正七年三月一日より之を施行す

附 則

高等試験令第七條第八條に關する件左の通定む

大正七年二月二十八日

文 部 大 臣

第一條 左の各條の一に該當するものは高等試験令第七條に依り普通教育に關し中學校卒業者と同等以上の學歷を有するものとす  
第一 專門學校入學者檢定規程第三條に依り一般の專門學校入學に關する試験檢定

に合格したるもの

二 專門學校入學科檢定規程第八條第一號に依り一般の專門學校入學に關し無試験檢定を受くる資格を有するもの

三 普通育に關する試験を受け中學校卒業以上の學力を以て入學程度とする大學豫科又は專門學校に入學したるもの

四 中學校卒業以上の學力を以て入學程度とする官立學校に入學したるもの

五 高等學校高等科第一一年を修了したるもの又は高等學校高等科第一二學年以上に入學したるもの

六 修業年限三年の大學豫科第一學年を修了したるもの又は修業年限三年の大學豫科第二學年以上に入學したるもの

第二條 左の學校は高等試験令第八條に依り高等學校大學豫科と同等以上と認む

一 高等學校高等科



二 大學々部

三 大學豫科

四 専門學校高等科にして中學校卒業以上の學力を以て入學程度として修業年限三年以上のもの

五 學習院高等科及元學習院高等學科

六 中學校卒業以上の學力を以て入學程度とする官立及公立の學校但し東京美術

學校東京音樂學校及修業年限三年に満たざるものを除く

七 中學校卒業以上の學力を以て入學程度とする修業年限二年以上の豫科を有す

八 主として普通教育に關する學科目を授くる私立専門學校にして特に文部大臣

の指定したるもの

第三條 高等試験令第七條の試験は文部大臣の指定する官立及公立の中學校に於て

毎年一回之を行ふ

前項の中學校及試験の期日は文部大臣豫め官報を以て之を持示す

第四條 試験を受けむとするものは試験願(甲號書式)に履歷書(乙號書式)及寫真

(手札形とし出願前六箇月以内に脱帽にて撮影したるものにして裏面に撮影年月

日、族籍、氏名を記載すべし)を添へ毎年三月一日より三月三十一日までの間に

試験を受けむとする中學校に差出すべし

第五條 試験を受けむとするものは手数料として五圓を納付すべし

前項の手数料は收入印紙を用い之を受験願書に貼付すべし其の既に納めたる後は

何等の事情あるも還付せず

第六條 學校長は試験に合格したるものに合格證書(丙号書式)を付與すべし

第七條 試験に關し不正の行爲ありたるものに對しては其の試験を停す試験合格決

定後發覺したるときは其の合格を無効とす



等八條 試験を了りたるときは、學校長は其の顛末を文部大臣に報告すべし

第六附 專科試験規則  
本令は大正七年三月一日より施行す

高等試験受験願書及之に添付すべき履歷書の書式は規定上一定のものはない試験の

都度豫め之を定め公告せらる。高等試験受験願書(内書き表)を付するべし

### 高等試験資格認定試験

高等試験の受験資格は、別項「高等試験規則」にある通り、中學卒業、專門學校入學  
檢定合格者等であるが、此の資格の無いものは、資格試験を受けて其れに合格すれ  
ば受験資格が出来る。

此の資格試験は毎年一回四月中旬に東京高等師範學校附屬中學校(小石川區大塚)及  
び廣島高等師範學校附屬中學校(廣島市千田町)で行はれ、試験科目は毎年同じで國  
語、漢文、歴史、地理、數學(算術、代數、幾何、三角)物理、化學の七科目で、外國  
語はない。(外國語の試験は豫備試験で行ふから此の試験には略される)。試験程度  
は中學卒業程度。試験施行の公告は一月廿日頃の官報に出るから、受験手續は其の  
頃に右の中學に承合して「志願者心得」を貰へば判る。

### 三、高等教員を目指して

高等學校教員檢定試験—中等學校教員檢定試験—小學校教員檢定試験

之等の細則乃至施行期日は、小學校教員檢定にあつては相當官廳の檢定課へ、中  
等及高等教員檢定にあつては文部省直接に問合せは細密に知ることが出来る。



#### 四、判任文官をして

判任文官試験は獨學者も直ちに受験することが出来る。之等試験の手續乃至細則は別に文官試験案内に詳しく出てゐるから此處には省略する。

文官普通試験

外務書記生試験

税關吏試験

裁判所書記登用試験

森林主簿採用試験

逓信省書記補試験

警部試験

電氣事業主任技術者資格認定試験

私設無線電信従事者資格認定試験

航空機操縦生

#### 判任文官

大体右の如きもので尙判任文官ではないが  
外務省留學生試験 專檢  
高等試験資格認定試験  
の華やかなる試験もある。

#### 五、獨學者が直ちに受験入學出来る學校

- 海軍兵學校
- 陸軍士官學校豫科
- 鐵道省敎育所普通部
- 日本大學高等工學校
- 海軍機關學校
- 商船學校(東京)
- 東京高等師範學校
- 攻玉社高等工學校
- 海軍經理學校
- 遞信官吏練習所
- 廣島高等師範學校

右の學校は直に受験が出来る。右の他に私立學校や專門學校の別科(或は二種生)に



は獨學者入學の資格がある。

大正十四年二月二日印刷  
大正十四年二月五日發行

定價金壹圓

編輯者 兼 治外山人  
東京市牛込區富久町六〇番地

印刷者 古川俊八  
東京市牛込區富久町六〇番地

印刷所 英美堂印刷所  
東京市牛込區富久町六〇番地



發行所 讚友社內 苦學同志會

東京市牛込區富久町六〇番地

振替東京六六二九七番



終

18 5/2